

「幼児の読み書き能力」

報 告 要 旨

昭和42年度

「就学前児童の言語能力に関する全国調査」

昭和47年3月

村 石 昭 三

天 野 清

国 立 国 語 研 究 所

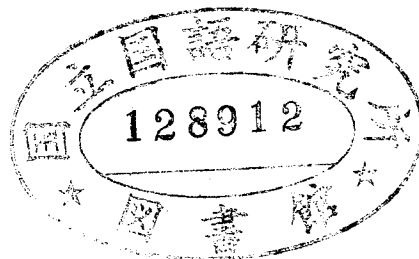
ここにふさめた内容は、国立国語研究所が「就学前児童の言語能力に関する全国調査」として、昭和42年度に実施した「就学前児童の文字力の調査」結果の報告要旨である。

なお、この調査の正式の報告書は下記のように公刊されているので、方法、結果の詳細を知りたい場合、また、本調査の方法や諸データを引用される場合には、下記の報告書を参照されたい。

国立国語研究所報告 45

幼児の読み書き能力 B5 528ページ

東京書籍刊 ￥4,500円



調査の概要

「就学前児童の言語能力に関する全国調査」は、現代の就学前児童の言語能力とその習得の過程、条件を全国的規模で明らかにし、国語問題と国語教育との基礎的資料を提供する目的をもって、昭和42年度から3年計画で実施したものである。この調査研究は、

- (1) 近年、就学前児童の言語能力の形成過程は、マスコミ特にテレビの普及によって大きく転換しているのではないか。
- (2) 就学前の幼児期は、言語形成の時期として言語教育上きわめてたいせつな時期であるから、この期のことばの習得過程を明らかにすることは重要である。
- (3) 幼児期の教育のあり方が社会問題化されてはいるが、その基礎となるような、言語能力についての実証的データがきわめて乏しい。
- (4) 就学前児童の言語能力については、各地に部分的調査はあるが、発音・文字・話しことばの全般にわたる全国的な概観は得られていない。したがって、この期の言語教育を充実させるため、その種の資料を整備する必要がある。

という問題意識を背景にして行なわれたものである。

3年間にわたって実施してきた調査の概要は、次のとおりである。

第1年次 就学前児童の文字力の調査

第2年次 就学前児童の語い力の調査

第3年次 就学前児童の語い、* コミュニケーション能力調査

* 第3年次の語い力調査は、第2年次からの継続発展である。

なお、第2年次、第3年次目の語い力調査、ならびにコミュニケーション能力調査は、すでに昭和43年度、44年度において本調査を実施済みであり、現在補充調査をも加えながら、それらの分析整理をすすめている。本報告書に続いて、適当な時期にそれらについても公表していく予定である。

ここで報告する就学前児童の文字力の調査は、昭和42年度に実施したもので、調査の内容は大別して次の二つに分かれる。

調査1 読み書き水準調査

ひらがなの清音・撥音・濁音・半濁音の読み書きテストと拼音、抑長音・長音・促音および助詞「は・へ」の読みテストを行ない、4、5歳児クラスの文字力の水準を明らかにする。そして、幼稚園や家庭に対するアンケート調査から、文字習得の要因をも分析した調査。 東北・東京・近畿

の3地方の全幼稚園から122幼稚園を層別抽出し、被調査児計2,217名(4歳児クラス818名、5歳児クラス1,399名)の幼児についての調査である。

調査2 特定幼児の文字(範囲・量)

4、5歳児クラスの幼児がどの程度の範囲(ひらがな・かたかな・漢字・アルファベット・数字)をどれだけ読み書きできるかを、文字習得の条件と関連づけて明らかにすることにした。全国の特
定18幼稚園の4、5歳児クラスの幼児計72名についての追跡調査である。

なお、本報告書ではそのうち5歳児クラス41名の結果が報告されている。

調査Ⅰ 読み・書き水準調査

1 目的

就学前児童（4才、5才児）を対象に、ひらがな文字の読み、書きについての課題を与え、テスト法によって、現在の就学前児童の文字の読み、書き能力の水準とその実態を明らかにするとともに、幼稚園・家庭を対象にして行なりアンケート調査等によって、その能力の発達に影響をおよぼしている諸要因や活動の実態を明らかにすることが、この調査の目的である。

2 調査方法

(1) テストの内容と構成

A 「読み」についてのテスト

- | | |
|--------------|------|
| I 清音、撥音（「ん」） | 46文字 |
| 濁、半濁音 | 25文字 |

以上、すべての幼児に対して、個々の文字の読みについて「調査Ⅰ調査文字カード」を利用して、逐字的にテストする。

- | | |
|-------------------------|----|
| II 拗音（例 おも <u>ち</u> ゃ） | 6問 |
| 促音（例 <u>き</u> って） | 3問 |
| III 長音（例 ひ <u>こ</u> うき） | 8問 |
| 拗長音（例 や <u>き</u> ゅう） | 6問 |
| IV 助詞の「は」「へ」 | 4問 |

以上、IIからIVの問題は、清音+「ん」46文字のうち、40文字以上を正しく読んだものについてのみ行ない、当該の音節をあらわす文字、およびその音節を含む語について、読みのテストを行なう。

B 「書き」についてのテスト

清音・撥音（「ん」）・濁音・半濁音

これは、前の「読みテスト」で正しく読めた文字についてのみ「書き」のテストを行なった。書きテストには、そのために特につくられた書きテスト用紙を利用し、個々の文字の筆順も、観察・記録される。

(2) 被調査児と標本抽出

東京、東北、近畿地方において、昭和42年度に在園している幼稚園児約50万人を母集団とし、そこから抽出した5才児1,497名、4才児896名を対象に調査を行ない、その結果

5才児	1,399名
4才児	818名
計	2,217名

の有効標本を得た。

標本の抽出は二段階等確率層別抽出法によるもので、まず、東京は区市町村を単位とする地域の類似性を基礎にして、東北、近畿は、府、市、町、村の人口数を基礎にして、それぞれ10、4、6、合計20の層にわけた。そしてその層内の幼稚園児(4才児、5才児の各クラス)総数に比例して、標本を抽出すべく、各層に標本のわりあてを行ない、その標本を調査するに必要十分な数の幼稚園を、その層の全幼稚園の中から、各幼稚園の在園児数に比例して無作為に抽出した。そして、次に標本が、各園の全幼児の中から、無作為に抽出された。後述する調査園は、このような手続きで抽出され、かつ、その園の承諾と協力にもとづいて実際に調査を行なった園である。園の左端に付いている記号、たとえば、T₁、K₁、H₁は、それぞれ、東京第一層、近畿第一層、東北第一層を意味している。

(3) テストの実施とテスト時間

各地の大学、研究所の研究者の協力を得て、幼児が就園している幼稚園で、個別テストの形で実施された。 テスト時間 20～30分

(4) 調査期間 昭和42年11月

3 家庭・幼稚園に対するアンケート調査

幼児の生活環境、文字生活(活動)、家庭での文字指導の実態を調べる目的で、幼児に対するこのテストが終了後、昭和42年12月にはじめてから、被調査児が通園している幼稚園を介して、アンケート用紙を被調査児の全家庭に配布した。また、被調査児が通園している全調査園(122園)に対しても、園の中での文字環境、文字指導の実態と態度を調べる目的で、アンケート用紙を配布した。そして、家庭へのアンケートについては、2,094通(回収率94.5%)の有効標本、園へのアンケートについては1,115通(回収率94.3%)の有効標本を得た。

4 再テスト・補充テスト

本テストが終了後、今回特に行なった「読み」のテストについて、次の2回の再テストと、1

回の補充テストを行なった。

(1) 第1回再テスト

今回のテストの信頼性(再現性)をチェックする目的で、東京の被調査児のうち、6幼稚園に在園している92名の幼児(5オクラス児36名、4オクラス児56名)を対象に、本テスト終了後2週間以内に、上のテストとまったく同じ問題で再テストを行なった。

(2) 第2回再テスト

今回のテストを受け、一定の期間がたったあと、幼児の読字能力はどう変化するのか、特に年長児が、就学を迎えるまでにどの程度進歩するものかの資料を得るため、本テストの終了後、3~4か月経過した昭和43年2月末から3月初めにかけて、東京・近畿の被調査児のうち、5オクラス児90名、4オクラス児86名に対して、読みについて、まったく同じ問題で再テストを行なった。

(3) 補充テスト

読みのテストで測られた各水準の特性を、より具体的にするため、昭和45年1月~2月の間に、東京・宮城・京都の3地点で、約200名の幼児を対象に、次の5種のテストを行なった。

ア 文字の知覚弁別テスト

イ 音節分解抽出テスト

ウ 文字の読みテスト

エ 語の読みと理解テスト

オ 文の読みと理解テスト

5 データの集計と計算

上記のデータは、一定の整理後、磁気テープに収められ、研究所にある電子計算機HITAC 3010を利用して、天野が作成した「汎性集計プログラム」で集計された。

6 調査園・調査員

調査に御協力いただいた調査園、ならびに調査員は下記の通りである。

§ 調査園

読み書き水準調査

層 園 名	
(東北地方20園)	
H ₄ 東岡幼稚園	T ₂ 言問幼稚園
H ₄ 聖和幼稚園	T ₂ 亀戸幼稚園
H ₄ 聖霊女子短大付属幼稚園	T ₃ 西神田幼稚園
H ₄ 青森幼稚園	T ₃ 青山学院幼稚園
H ₃ 飯坂幼稚園	T ₃ 青い鳥幼稚園
H ₃ つつみ幼稚園	T ₄ 文京第一幼稚園
H ₃ 白梅幼稚園	T ₄ 音羽幼稚園
H ₃ ザベリオ学園幼稚園	T ₄ 双葉幼稚園
H ₂ 大山幼稚園	T ₄ 巣鴨幼稚園
H ₂ 水野谷幼稚園	T ₅ 落合幼稚園
H ₂ 小百合幼稚園	T ₅ 清和学園幼稚園
H ₂ ひかり幼稚園	T ₅ 友栄学園幼稚園
H ₂ 白河幼稚園	T ₆ 愛隣幼稚園
H ₂ 天真幼稚園	T ₆ 明星幼稚園
H ₂ 聖テルジア幼稚園	T ₆ ばら幼稚園
H ₁ 四倉第一幼稚園	T ₇ ひかり幼稚園
H ₁ 中仙幼稚園	T ₇ 中野なかよし幼稚園
H ₁ 佐沼幼稚園	T ₇ 第一若宮幼稚園
H ₁ おさなご幼稚園	T ₇ 裕和幼稚園
H ₁ 河北幼稚園	T ₇ 高井戸幼稚園
(東京地方36園)	T ₇ 松苔幼稚園
T ₁ 保木間幼稚園	T ₈ 明善幼稚園
T ₁ 第二押上幼稚園	T ₈ 池上みどり幼稚園
T ₁ 明昭幼稚園	T ₉ 平塚幼稚園
T ₂ 入谷幼稚園	T ₉ たちばな幼稚園
	T ₉ 日本音楽学校付属幼稚園
	T ₁₀ マルガリタ幼稚園
	T ₁₀ 府中ひばり幼稚園
	T ₁₀ 多摩みどり幼稚園
	T ₁₀ みそら幼稚園
	T ₁₀ 明成幼稚園
	T ₁₀ 福生幼稚園
	(近畿地方66園)
	K ₆ 西野田幼稚園
	K ₆ 五条幼稚園
	K ₆ 中大江幼稚園
	K ₆ 長池幼稚園
	K ₆ みつやめぐみ幼稚園
	K ₆ 大宮幼稚園
	K ₆ 金塚幼稚園
	K ₆ みはと幼稚園
	K ₆ 鶴見橋幼稚園
	K ₆ 御幣島幼稚園
	K ₆ 鶴町幼稚園
	K ₆ 遠里小野幼稚園
	K ₆ 育和学園幼稚園
	K ₅ 慧日幼稚園
	K ₅ 睦美幼稚園
	K ₅ 円山幼稚園
	K ₅ 板橋幼稚園
	K ₄ 西須磨幼稚園
	K ₄ 青い鳥幼稚園

K ₄	呉田幼稚園	K ₄	愛徳幼稚園	K ₂	高鷲幼稚園
K ₄	垂水幼稚園	K ₃	寺方幼稚園	K ₂	二色幼稚園
K ₄	フタバ幼稚園	K ₃	守口幼稚園	K ₂	鶴之荘幼稚園
K ₄	飾磨幼稚園	K ₃	御幸幼稚園	K ₂	三輪幼稚園
K ₄	城北幼稚園	K ₃	八雲幼稚園	K ₂	重春幼稚園
K ₄	城東幼稚園	K ₃	浄幼稚園	K ₂	日方幼稚園
K ₄	健康幼稚園	K ₃	五領幼稚園	K ₁	山城精華幼稚園
K ₄	仁川学院マリアの園幼稚園	K ₃	成美幼稚園	K ₁	高石幼稚園
K ₄	浜甲子園幼稚園	K ₃	花園幼稚園	K ₁	藤井寺南幼稚園
K ₄	園和幼稚園	K ₃	南幼稚園	K ₁	石屋小付属幼稚園
K ₄	下坂部幼稚園	K ₃	晴嵐幼稚園	K ₁	下三方幼稚園
K ₄	東光幼稚園	K ₂	橘幼稚園	K ₁	温泉幼稚園
K ₄	曾根幼稚園	K ₂	綾部幼稚園	K ₁	城崎幼稚園
K ₄	八尾平和幼稚園	K ₂	庵我幼稚園	K ₁	高野山幼稚園
K ₄	進修幼稚園	K ₂	長浜幼稚園北舎	K ₁	白浜第一幼稚園
K ₄	堺北幼稚園	K ₂	石切幼稚園		

(注) H = 東北, T = 東京, K = 近畿, H₄ = 東北第4層をあらわす。

補充調査

道灌山幼稚園(東京), 豊島なでしこ幼稚園(東京), 伏見板橋幼稚園(京都), 鹿島台第一幼稚園(宮城), 王子保育園(東京)

準備調査

舟戸幼稚園(埼玉), 川口南幼稚園(埼玉), 原山幼稚園(埼玉), 種足幼稚園(埼玉)

§ 調査員（順不同、所属は調査時当時の所属）

読み書き水準調査

（東京）

調査員名	所 属
石川 和男	北区教育研究所
石本 幸生	台東区児童相談所
岩野 武志	江戸川区教育研究所
志賀 昌成	杉並区立済美教育研究所
野田 昌道	葛飾区教育研究所
葭田 尚子	東京都教育庁
河井 芳文	東京学芸大学
長谷川 茂	お茶の水女子大学
花上 洋代	"
増井美代子	" 大学院

青木 剛士	東京教育大学大学院
天野 幸子	"
牛島めぐみ	"
大日方重利	"
竹内 衛三	"
福島 脩美	"
足立 自朗	東京大学大学院
塗師 文武	"
星 三和子	"

（近畿）

武田 浩	京都府教育研究所
大塚 ナホ	"
斎藤 恪三	"
長田 久男	京都市教育研究所
出川 光治	"
高橋 文雄	"
井狩 斗	滋賀県教育研究所
赤木 愛和	大阪府科学教育センター
扇田 常博	"
高原 治	"
三原 猛	"
中井 義治	"
直塚 玲子	"

西村 淑子	大阪府科学教育センター
相馬 信男	大阪市教育研究所
吉川 教	"
萬代 彰子	"
俵 芳子	"
中村 昇司	高槻市教育研究所
神 高雄	堺市教育研究所
武田 憲道	豊中市教育研究所
秦 一士	兵庫県播磨児童相談所
橋本 隆	"
田中てい子	西脇市立教育研究所
大塚 歌子	兵庫県教育委員会
内藤 勇次	"

谷口 正己	神戸市立教育研究所
住本 吉章	西宮市立教育研究所
中田 義朗	〃
吉永 恣郎	尼崎市立教育研究所
黄楊 荒雄	〃
橋本富士子	明石市立教育研究所
神谷 光夫	和歌山県教育研修センター

杉原 治	和歌山県教育研修センター
田村 裕	和歌山市立教育研究所
森下 正泰	京都大学大学院
千葉 節子	〃
山田 和子	〃
小林 保太	〃
山本 愛子	兵庫県美方郡温泉町教育研究所

(東北)

斎藤 清吉	青森県教育研究所
蝦名 栄治	〃
坂口 忠	岩手県立教育センター
中田 雅子	岩手県立盛岡短期大学
向山 清	秋田県教育研究所
武田 一夫	鶴岡市教育研究所
山岸 真一	酒田市教育研究所

三沢 清男	山形県教育研究所
佐藤 弘	宮城県教育研究所
鹿野 順子	〃
武藤 義男	福島県教育研究所
鈴木 忠良	〃
梅井 和雄	〃

(補充調査)

江川 洋子	豊島児童相談所
牛島めぐみ	東京教育大学院
田島 道代	〃
藤原 寛子	京都大学大学院
寺田ひろ子	〃

梶山 方高	京都大学大学院
片桐 和雄	東北大学大学院
荒川由美子	〃
池田 悦子	東北大学教育学部

7 結 果

(1) 読みの水準

すでにプリテストで、71文字の範囲で、読字数は正規分布せず、平均読字数を求めてもあまり意味がないことが確認されている(第1図)。そこで、次のような基準で、読みの水準を設定し(第1表)、それから、全体の状況を知ることにした。これらの水準は順序尺度を構成している。この表の基準(1)で、20、60の箇所区切り点を設定しているが、それは、第1図

第1表 読みの水準の基準

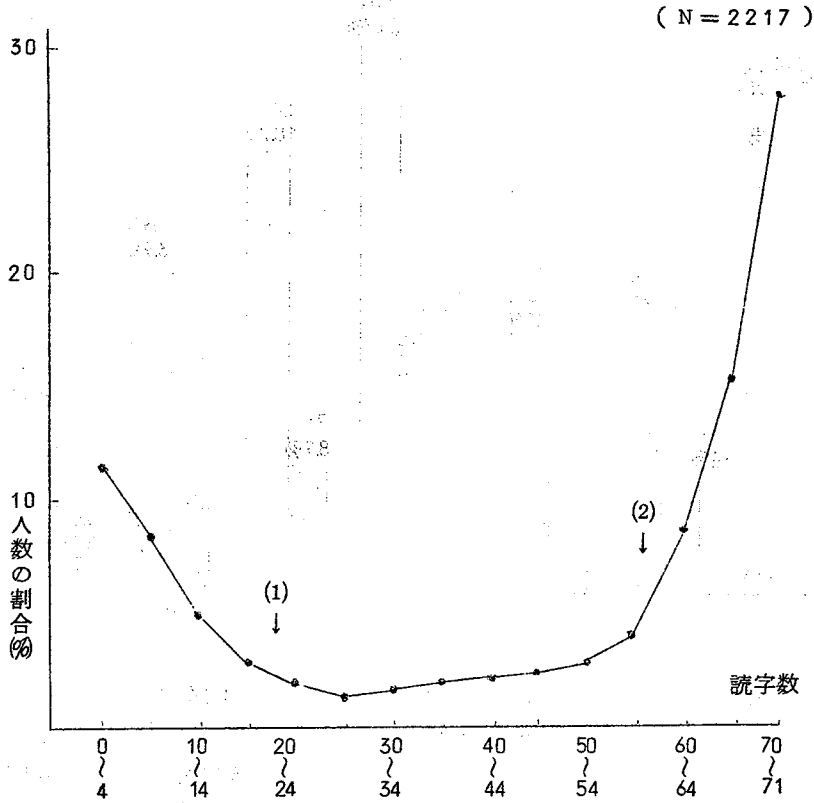
水準	基準		その具体的な特性
	(1)	(2)	
	清・濁・半濁・撥音 71文字のうち、読 める文字の数・範囲	5種類の特殊音節の うち、マスターして いる音節の種類の数	
A	0	0	まったく1字も読めない。
B	1 ~ 5	0	自分の名前に含まれる文字の読みの 学習が始まった。
C	6 ~ 20	0	学習能力の形成期。姓名のいずれか 一方が読める。
D	21 ~ 59	0	かな文字の習得期。どんどん各文字 の読みの習得が進行している。
E*	60 ~ 71	0	清音のほぼすべてが読めるだけで なく、濁・半濁音もかなり読める。
F	60 ~ 71	1 ~ 2	71文字の読みほぼ完了。特殊音節 1-2種をマスター。
G	60 ~ 71	3 ~ 4	特殊音節の読み、3-4種マスター。
H	60 ~ 71	5	全部の音節の読みをマスター。

* Eの水準の中に、例外的なものとして、読字数21~59で、特殊音節1種類以上マスターしているものが含まれている。だが、その数は少数で16名にすぎないので、表の中にしるしていない。

** マスターとは、完全に習得しているということで、与えた問題を全部正しく読めた場合をさす。

の(1)、(2)の位置を占めている。20文字に区切り点を設定したのは、別の研究から、およそそれまでに学習能力の形成が行なわれると考えられたからである。また、60の区切り点は、清音の読みを含めて、かな文字の基本音部の読みの学習の概略的終了を意味するものとして設定した。また、後の分析で、群の比較を行う際にE水準が全体の中央値をなすことから、「E水準以上の幼児の割合」を、その群の成績を示す代表値として利用することになる。

第1図 71文字の範囲の読字数の分布



(2) 幼児のかな文字の読み・書きの習得状況

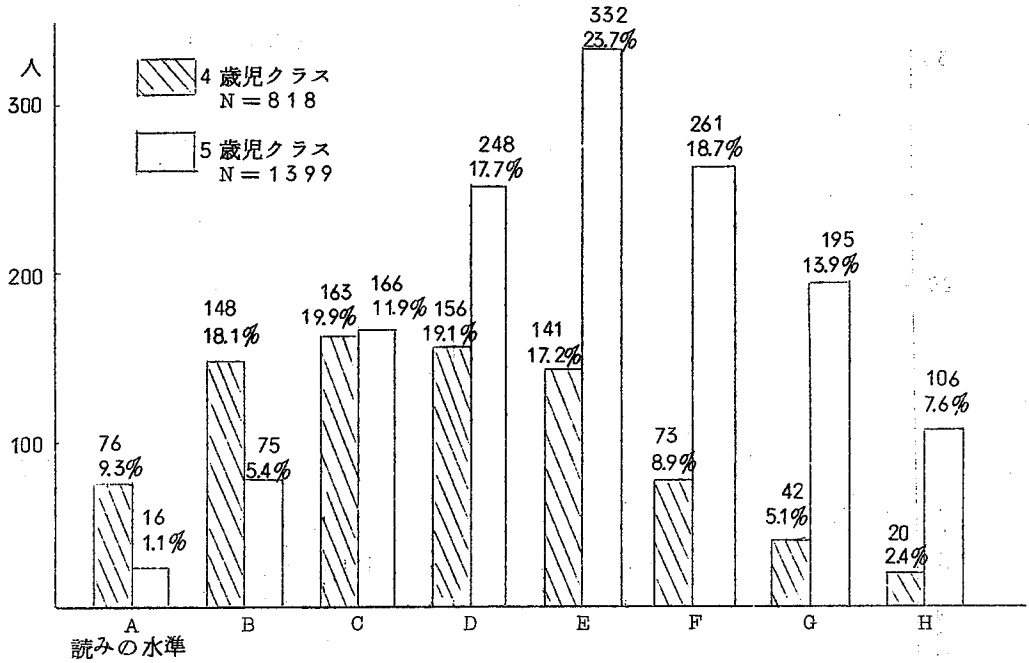
先の水準にもとずいて、各読みの水準の分布を示すと第2図の通り。

また、読みの水準に順じて、幼児の書字の程度を6つの水準に分け、その分布を第3図に示す。

第1図より、11月の調査時点で、まったく一字も読めない幼児は、5才児クラス1.1%、4才児クラスで9.3%に過ぎず、反対に60文字以上読める（E水準以上の）幼児の割合は、5才児クラス全体で63.9%に達し、4才児クラスでも33.6%占めていることがわかる。また、書きは、読みにくらべて、その習得は遅れており、60文字以上正しく書ける幼児の割合はきわめて少ない。しかし、一字も正しく書けない幼児は、5才児クラスでは5.3%を占めるに過ぎず、21文字以上正しくかけている幼児は、5才児クラスで、66.7%に達し、読みと共に書活動が、この期の幼児のものになりつつあることが示されている。

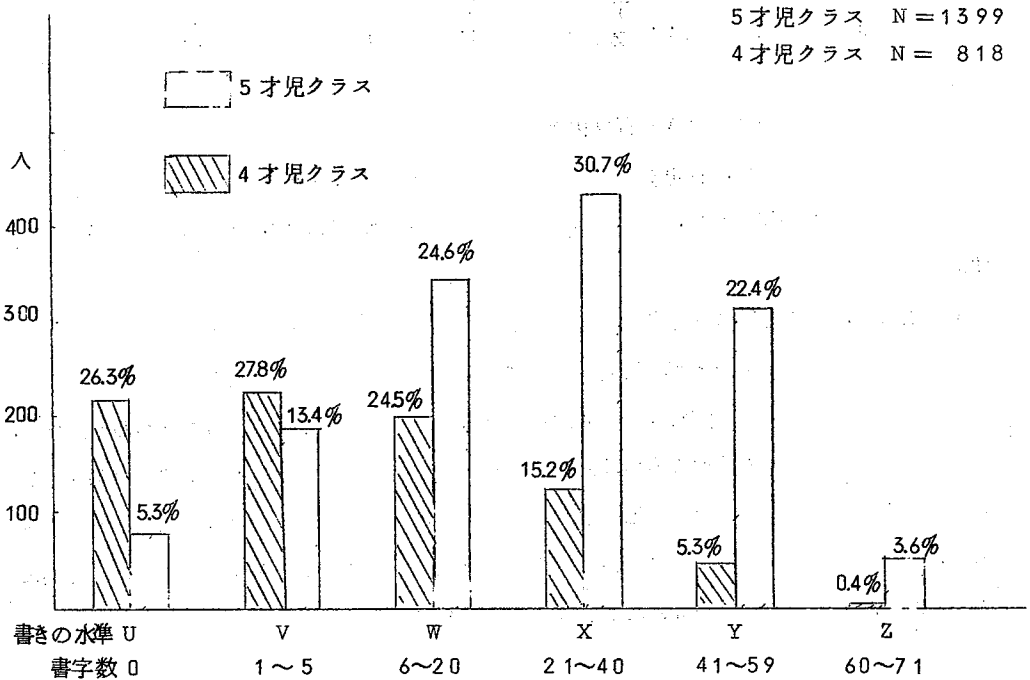
第2図 幼児のひらがなの読み

昭和42年11月

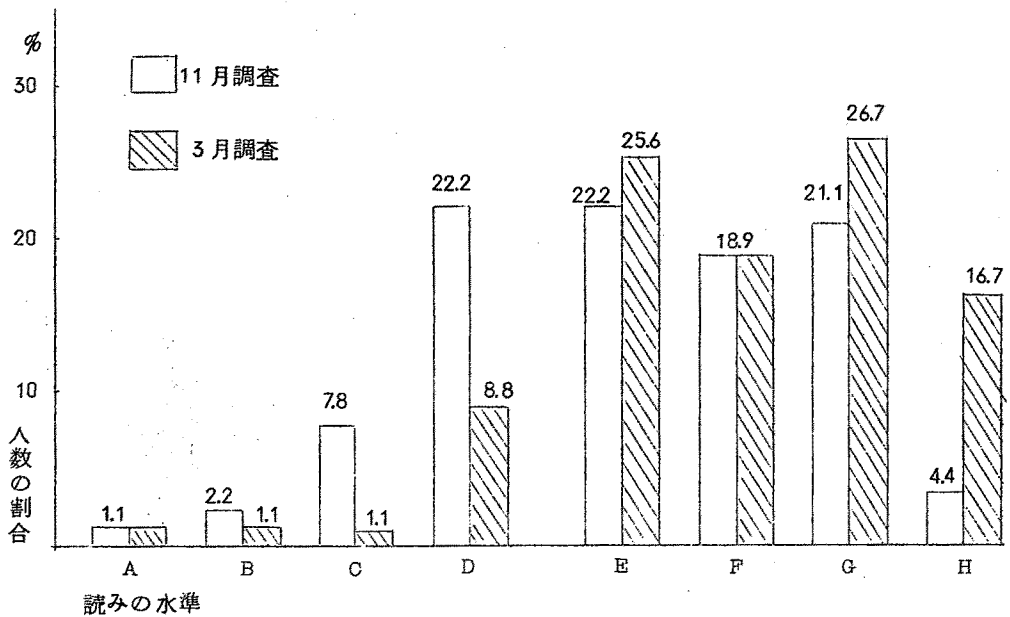


第3図 幼児の「ひらがな」の書き
(字形、筆順も正しい)

昭和42年11月



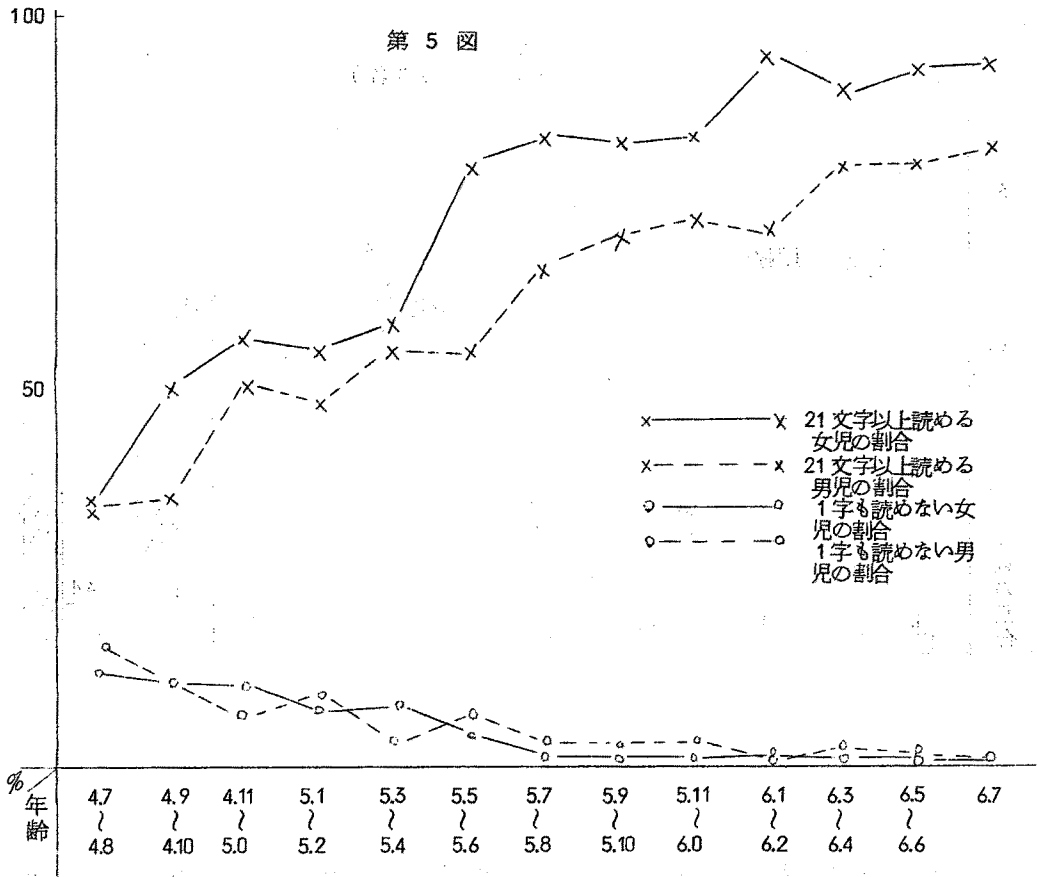
第4図 11月調査と3月調査の比較
(5才児クラスの90名)



また、就学直前の状況を知るため、42年2月下旬から、3月上旬にかけて、大都市、中間都市の被調査児176名について、読みについて再調査を行なった結果、5才児クラス(90名)について、第4図の結果が得られた。11月から3月上旬までの約3ヶ月の間の進歩は、また顕著で、G水準、H水準の幼児の割合が増大するだけでなく、D水準以下の幼児の割合も減少し、60文字以上読める(E水準以上)の幼児の割合は、実に87.9%に達していることが示された(この90名の11月時点のE水準以上の割合は、66.6%)。

また、11月に行なった本調査のデータを、暦年令毎に整理すると、第5図のようになる。まったく文字を読めない幼児は4才代後半で、男女平均11~12%なのが5才代後半になると、男女平均2%(男児約3%、女児1%)になることから、今日の幼稚園児の約90%は4才代から、なんらかの形でかな文字を覚えはじめること、さらにその残りの10%の幼児のうち7~8%は、5才代前半からかな文字を覚えはじめることが容易に推測される。

また、20文字前後の読みを習得するまでに、かな文字を学習するために必要な基本的な学習能力が形成され、後の学習が急速に進むと考えるならば、5才代前半で50~60%の幼児が、5才代後



半で女児の80%、男児の70%の幼児が、少なくともそういう体勢にはいっているか、もしくはそれ以上の水準まで達しているということになる。

これらの諸データから、現代の幼児(幼稚園児)の多く(約90%)は、4才代よりかなり文字を習得しはじめ、その習得は4才代から6才代までの長い期間にわたって経過し、就学するまでに、かな文字について予想以上に高い水準の能力を獲得しているという結論がとり出された。

また、大都市の場合幼稚園児の少なくとも80%は(11月の時点では、大都市の幼児は70%)は6.0文字以上のかな文字を読める状態で、就学を迎えることになると推測される。

また、今回の調査結果を、昭和28年4、5月に、当研究所が小学一年生を対象に行なった調査結果と比較すると、第2表に示す結果が得られた。

昭和28年の被調査児は幼稚園・保育園を卒園したものや、そうでないものを含む小学校に入學したばかりの生徒で、昭和42年の被調査児は、幼稚園に在園中の5オクラス児、4オクラス

第2表 昭和28年の調査との比較

	調査年月	対象	調査園・校	被調査児数	46文字中 読める字 の平均	46文字中 書ける字 の平均	71文字中 読める字 の平均	71文字中 書ける字 の平均
昭和28年調査	昭和28年 4～5月	6才児(入学 した児童)	東京2校 * 近郊都市の } 計9校 学校4校 農村部3校	読み 650名 書き 613名	26.1	17.8	34.8	22.7
今回の調査	昭和42年 11月	幼稚園児(4 才児クラス 5才児クラス)	東京・東北・近 畿より抽出した 122園	4才児クラス 818名	24.4	8.7	33.5	10.8
				5才児クラス 1399名	36.8	19.9	53.0	26.0

* ただし、標本は標本抽出法に基づかない。「入門期の言語能力」に載せられている数値に誤りが認められたので、再計算してここに載せた。また、書きについては農村部1校のデータが欠落しているので8校について計算して出したものである。

児であることを、あくまでも考慮したうえでこの両者を比較してみると、昭和28年入学当時の小学校1年生の文字の読みの程度は、昭和42年秋の幼稚園4才児クラスのそれに近似し、昭和28年の小学校1年生の書きの程度は、昭和42年の幼稚園5才児クラスのそれにほぼ相当するかややそれ以下であることがわかる。

このようなことから、現代の幼児のかな文字習得の年令的時期は以前の幼児のそれに比べはやまっているという知見が得られた。

(3) 幼児のかな文字習得を条件づけている諸要因とその機制

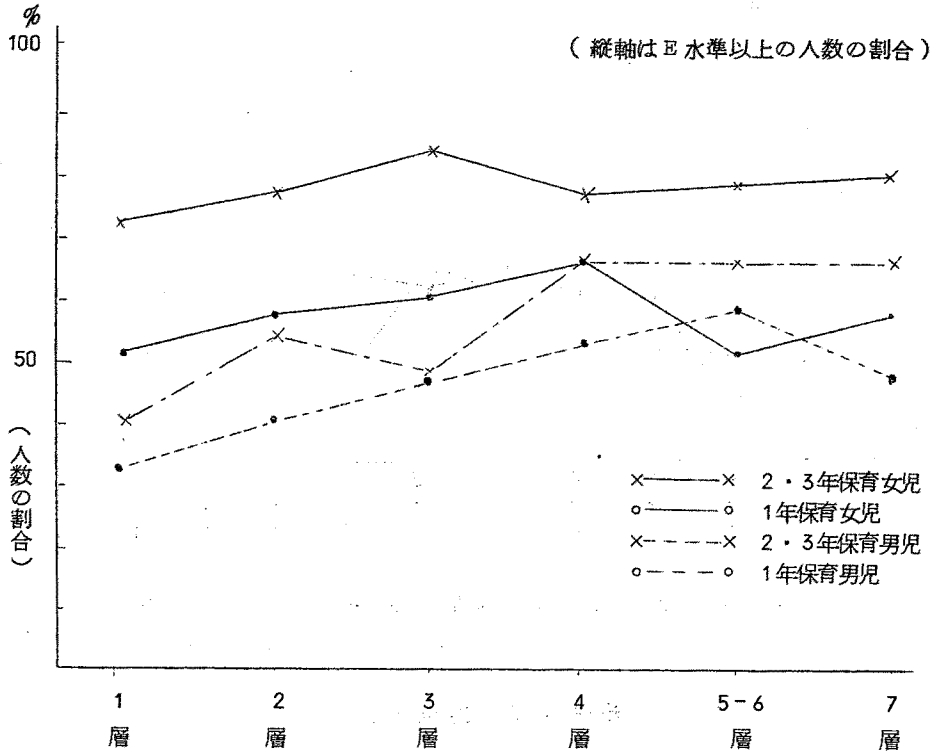
この期の幼児の文字習得を条件づけている諸要因や、4才代に幼児がかな文字を習得しはじめる構制を明らかにするため、家庭および幼稚園に対するアンケート調査、補充調査の結果を分析したが、その結果から、次のことが明きらかにされた。

- ① 幼児のこの時期のひらがなの習得は、幼児の活動の内容や年齢・性の要因のほか、幼稚園で教育を受ける年数の長さや家庭の諸条件などの外的条件によって大きく条件づけられている。
- ② 特に5才児クラスの読みの習得の場合、幼稚園で教育を受けた年数の長さ(保育年数)は、それを条件づけている最も大きな要因の一つで、その年数の違いによって、かなりの個人差が認められた。
- ③ また、男女差は読み書きの両方に顕著にみられ、女兒は一般に男児よりも早く習得する。

特に、それは5才代にはいってはっきり現われる。

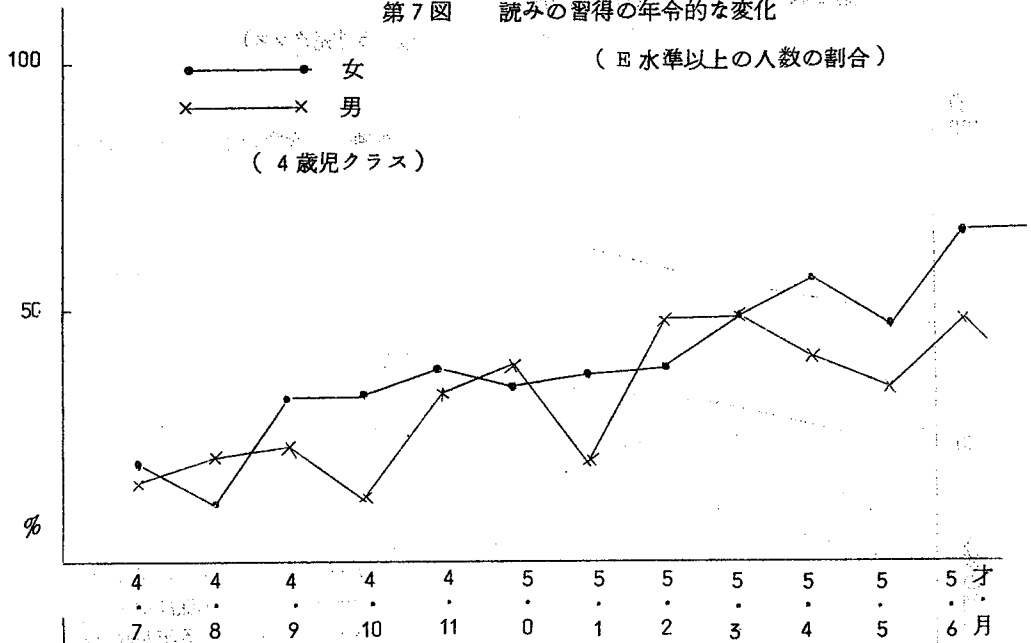
- ④ 幼児は、多く4才代にはいってから、ひらがなを習得しはじめるが、それでもなお、暦年齢は文字習得を条件づけている要因の一つで、4才児・5才児クラス内で、平均年齢の上群と下群と比較した場合、よく習得している幼児の割合は、常に年齢の上の群のほうが大きかった。そして、特に年齢の要因は、読みの習得よりも、書きの習得に大きく作用している。
- ⑤ 子どもの活動と文字習得との関連については、ア テレビ視聴時間 イ 絵本・漫画 ウ 物語り本への接触 エ 遊びの好みについて分析したが、アについては、むしろマイナスの連関があること、イ、ウについてはプラスの連関があることが明らかにされた。またエについては、屋内で遊ぶことを好む幼児のほうが外で遊ぶことを好む幼児より、よく文字を習得していることが示された。
- ⑥ 家庭の条件については、ア 共働きか、イ 兄弟の有無、ウ 家で購入するおとな用の本の冊数、エ 購読している新聞の種類、オ 親の学歴、カ 親の職業などについて分析したが、その結果、イエを除く、すべての要因は、幼児の文字の読みの習得に一定の関連を持っていることが示された。
- ⑦ 親の文字に対する指導態度についても分析したが、多くの親は一般に幼児が自発的に文字を覚えるのに任せ、学習しやすい条件や、必要に応じた部分的な援助を与えるという態度であること、およびこの態度が幼児の文字習得に一定の寄与をしていることが明らかにされた。
- ⑧ ⑤、⑥、⑦で指摘している子どもの活動、家庭の諸条件、家庭の指導、態度の要因は、いずれも幼児のかな文字習得を条件づけているが、いずれも決定的なものではなく、その作用は、園の保育・教育(を受ける長さ)の作用よりも小さい。
- ⑨ 幼児が、なぜ4才代にはいってひらがなを覚えはじめるのかという問題については、補充調査によって、ひらがなの習得の基礎になっている音節分解・抽出行為、文字についての知覚識別機能が4才代において、部分的に形成され、この期に文字習得を可能とする条件がつけられているという事実が確認された。また、これらの行為・機能は、初めは部分的にしか形成されておらず、後続する文字習得の中で完全なものになることも明らかにされた。これらのことを具体的に示しているいくつかのデータを以下に示す。

第6図 かな文字の読みの習得における
 層・性・保育年数要因の比較(5才児クラス)

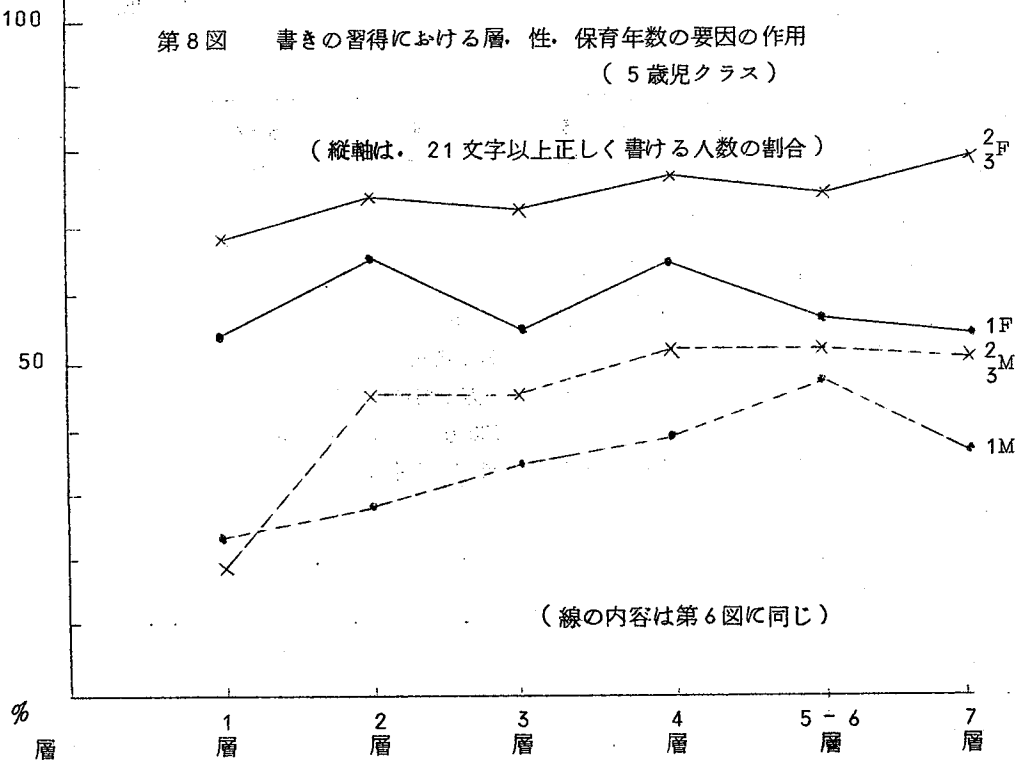


- 1 層 ; 郡 部
- 2 層 ; 人口 10 万以下の都市
- 3 層 ; 人口 10 万～ 20 万の都市
- 4 層 ; 人口 20 万～ 130 万の都市
- 5 - 6 層 ; 人口 130 万～ 1,000 万 (大阪・京都)
- 7 層 ; 人口 1,000 万以上都市 (東京)

第7図 読みの習得の年令的な変化

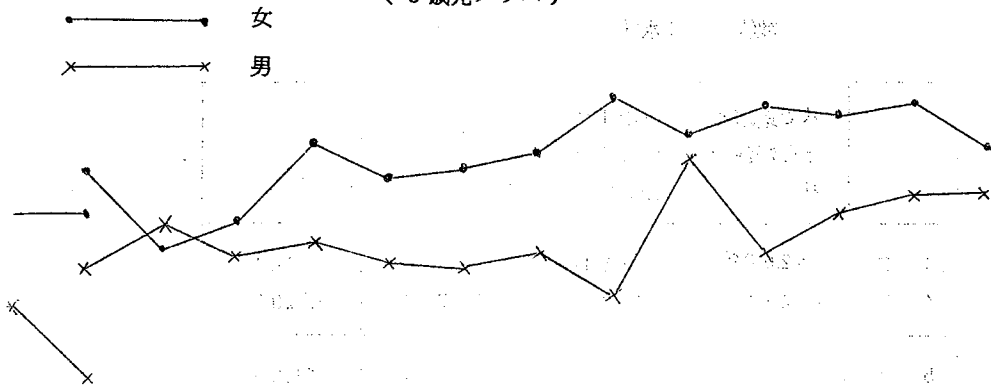


第8図 書きの習得における層、性、保育年数の要因の作用
(5歳児クラス)

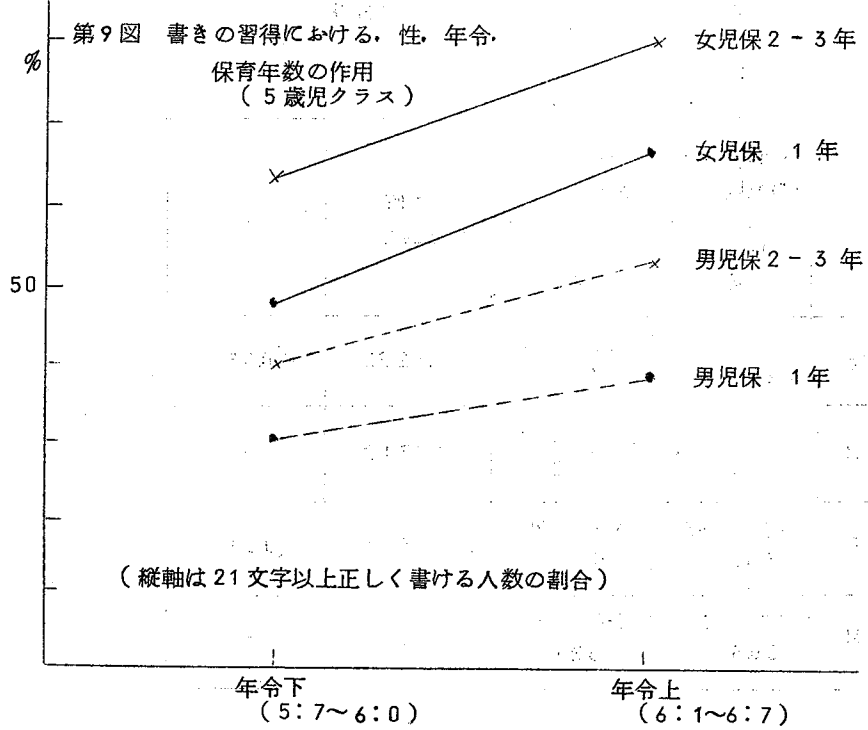


第7図の続き

(5歳児クラス)



5 . 5 . 5 . 5 . 5 . 6 . 6 . 6 . 6 . 6 . 6 . 6 . 6 . 才
7 . 8 . 9 . 10 . 11 . 0 . 1 . 2 . 3 . 4 . 5 . 6 . 7 . 月



第3表 遊びの好みと文字の読みの習得との関連

(数値は、E水準以上の幼児の割合)

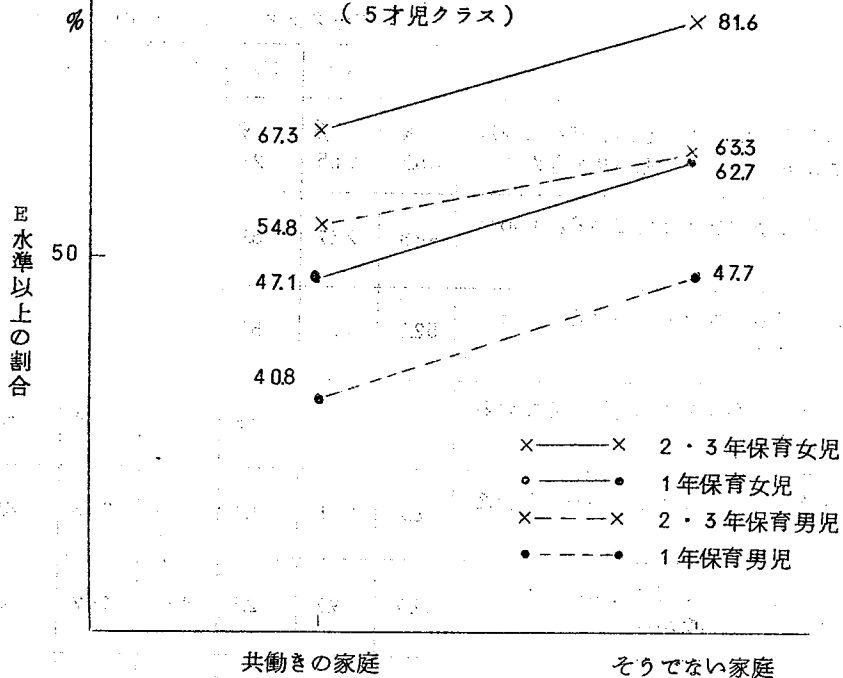
		外で遊ぶことを好む幼児	家の中で遊ぶほうを好む幼児	χ^2 値 (df=1)	P
4	F	32.08%	46.51%	9.1802	<0.01
4	M	27.24%	45.71	5.1788	<0.05
5	F	69.23	79.23	6.4934	<0.05
5	M	53.80	65.74	7.4825	<0.01

第4表 「共働き」の家庭と文字の習得

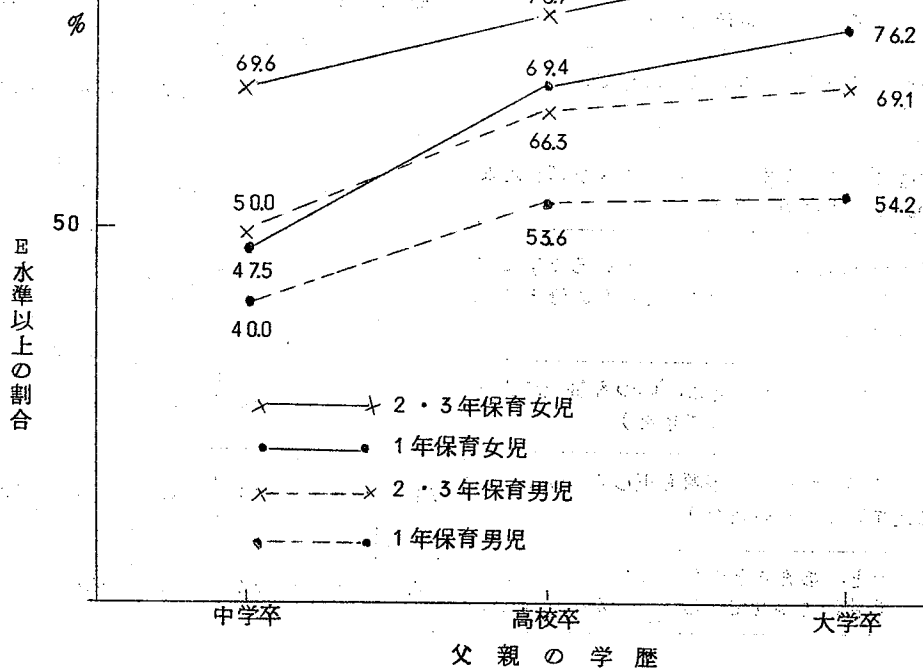
(数値はE水準以上の幼児の割合)

クラス	性	「共働き」の家庭		そうでない家庭		χ^2 値 (df=1)	P
		F	N %	F	N %		
4	F	23	83 27.7	120	294 40.8	4.7220	<0.05
4	M	20	78 25.64	99	307 32.2	1.2712	—
5	F	90	163 55.2	368	490 75.1	17.5363	<0.01
5	M	77	153 50.3	280	490 57.1	3.0662	—

第10図 共働きの要因と保育年数の要因の比較
(5才児クラス)



第11図 父親の学歴と保育年数の要因の比較
(5才児クラス)



第5表 文字についての家庭の指導(アンケート)

	4才児クラス			5才児クラス		
	Yes	No	NA	Yes	No	NA
1. 特別に指導しないで、こどもがしぜんにおぼえるのにまかせている。(まかせてきた)	% 85.7	% 11.5	% 2.8	% 83.7	% 13.2	% 3.1
2. 字のかいてある積木をあたえている。(あたえてきた)	68.8	27.9	3.4	63.7	31.6	4.6
3. 字や絵のかいてあるカードをあたえている。(あたえてきた)	52.8	41.9	5.3	55.4	38.6	6.0
4. 積木やカードをつかって積極的に教えている。(教えてきた)	9.0	85.4	5.6	10.9	82.4	6.8
5. ワークブックをつかって教えている。(教えた)	6.2	87.5	6.3	7.7	84.3	8.0
6. 質問をしてきたら教えるていどで、それ以上は特別にしない。(しなかった)	87.9	9.7	2.5	84.8	10.9	4.3
7. 絵本をいっしょに読むようにして、教えている。(教えてきた)	44.3	49.4	6.3	39.4	52.4	8.2
8. 兄や姉がべんきょうするそばで、それとなくおぼえている。(おぼえた)	36.5	48.0	15.5	36.5	47.5	16.0
9. 兄や姉にいろいろきいておぼえている。(おぼえた)	31.2	50.8	17.9	32.7	48.6	18.7
10. 幼稚園にみんなまかせて、何も特別に教えない。(教えなかった)	57.7	35.4	7.0	59.6	33.2	7.1
11. 外に出た時は、カンバン等いろいろな字に注意をむけ、おぼえさせている。(おぼえさせてきた)	26.7	65.9	7.4	31.2	60.8	8.0
12. こどもが字をかくときは、いつも筆順に注意を払っている。(払ってきた)	59.2	35.4	5.4	61.4	34.1	4.6
13. 自分の名前だけは、筆順も正しく書けるよう教えている。(教えた)	71.9	23.7	4.4	74.2	20.3	5.5
14. 筆順など、あまりとやかく言わないで、子どもの自由にまかせている。(まかせてきた)	34.3	58.1	7.6	36.3	54.9	8.8

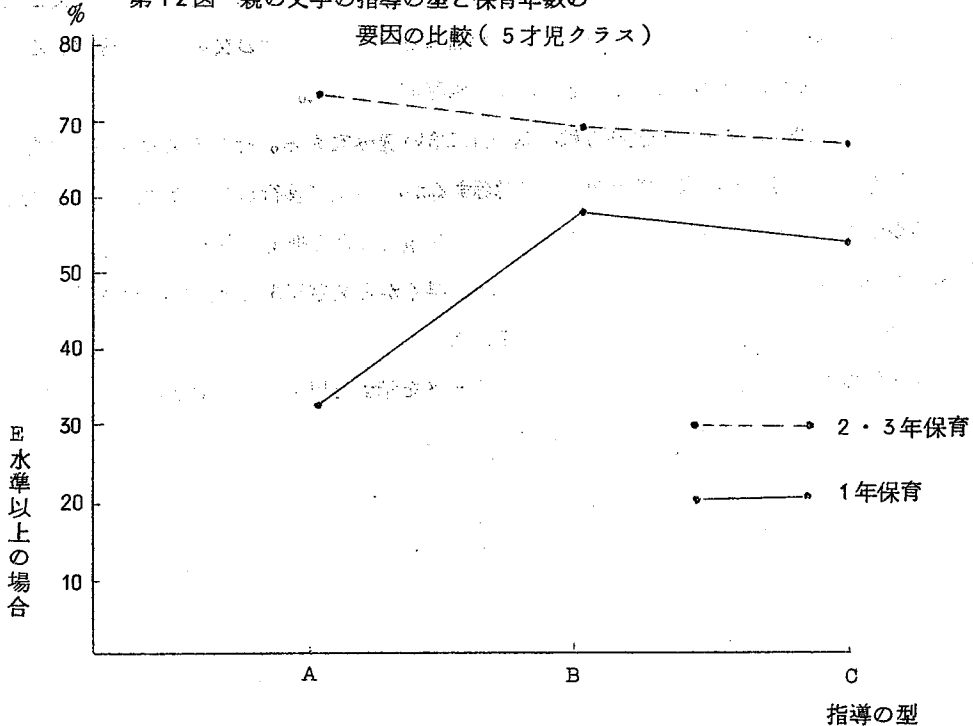
第6表 家庭における文字の指導の型とその割合

(+)はその項目に「はい」と答えたこと。(×)はそれ以外の反応をさす。(±)は、両方を含む。

型	項目 (1)(2)(3)(4)(5)	人数 %	計
A	特別の指導をせず、子どもがしぜんに覚えるのに任す。積み木やカードやワークブックも使わない。	(+) (×) (×) (×) (×) 365 17.4	365 (17.4%)
B	i) 積み木を与えている。カードやワークブックは使っていない。	(±) (×) (×) (×) (×) 475 22.7	1395 (66.6%)
	ii) カードを与えている。積み木やワークブックは使っていない。	(±) (×) (×) (×) (×) 267 12.8	
	iii) 積み木とカード両方を与えている。ワークブックは使っていない。	(±) (×) (×) (×) (×) 653 31.2	
C	i) 積み木やカードを使って積極的に教えている。	(±) (×) (×) (×) (×) 150 7.2	300 (14.2%)
	ii) ワークブックを使って教えている。	(±) (±) (±) (×) (×) 87 4.2	
	iii) 積み木やカードを使って積極的に教えている。ワークブックも使って教えている。	(±) (×) (×) (×) (×) 63 3.0	
D	その他	(-) (×) (×) (×) (×) 34 1.6	34 (1.6%)
計		2,094	2,094

第12図 親の文字の指導の型と保育年数の

要因の比較(5才児クラス)



8 この期の幼児の文字活動の特徴

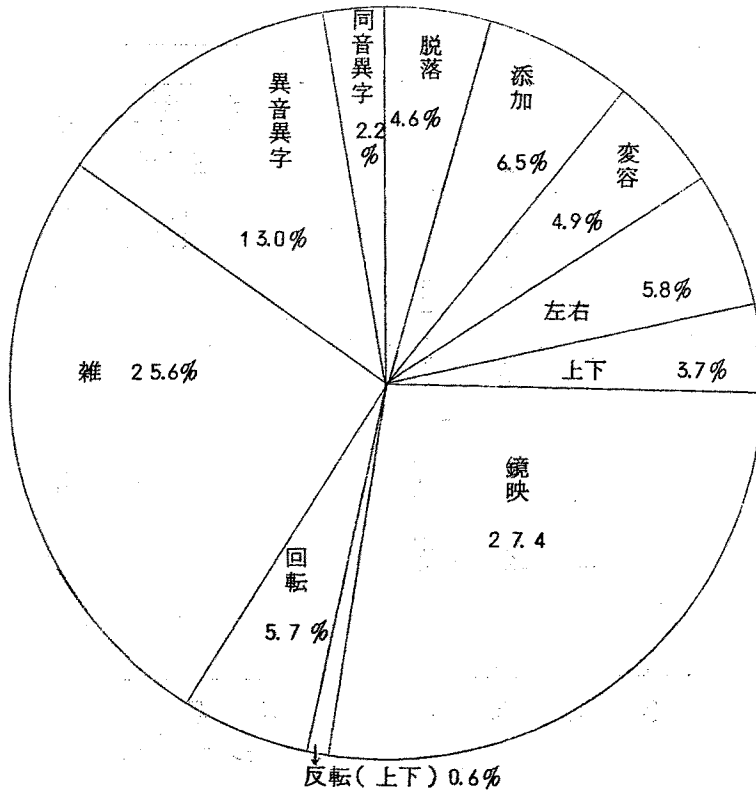
誤りの分析、アンケート調査、補充調査から、この期の幼児の文字活動について、次のような特徴が明きらかにされた。

- (1) 書くにあたっては、筆順の基準外反応が多く、全体の47%を占める。また、字形の書き誤りには鏡映文字が最も多く、全体の誤りの27%を占めている。
- (2) 幼児の文字の読み誤り、書き誤りはこの期の文字に対する知覚・識別反応の特質と関係している。
- (3) 特殊音節の読み誤りは、これらの特殊音節の表記の特別のルールを知らないということからくる未形成の誤りが中心的位置を占めている。
- (4) 幼児は、文字を読みはじめると、比較的早くから、それに伴って書くことに関心を持ち、行動を始めている。
- (5) 幼児は比較的少数のひらがな(21~59文字)を覚えるようになると、単語を読み、その意味を理解することができる。
- (6) 幼児は、60文字以上文字を覚えれば、とにかく文を読むことができる。しかし文の内容を理解することは、また別の能力を必要とすることで、60文字程度読める幼児の文を理解する程度は、小学校1年1学期中ごろに教科書に提示される程度の文を独力で理解することが要求された場合、その正反応率は50%程度であった。
- (7) この期の幼児の文を読む読み方は、基本的に拾い読みである。そして文の読み方は文字の読みの水準に応じて、次第に単語読みに移行するが、完全に移行しきった幼児の割合は比較的少なく、11月調査時点で、5才児クラスで1割程度だと推測される。
- (8) このほか、特にアンケート調査から、幼児は早くから文字に関心を持ち、その習得や文字と関連した活動に積極的であることが示された。
これらのことを具体的に示す、いくつかのデータを示すと以下の通りである。

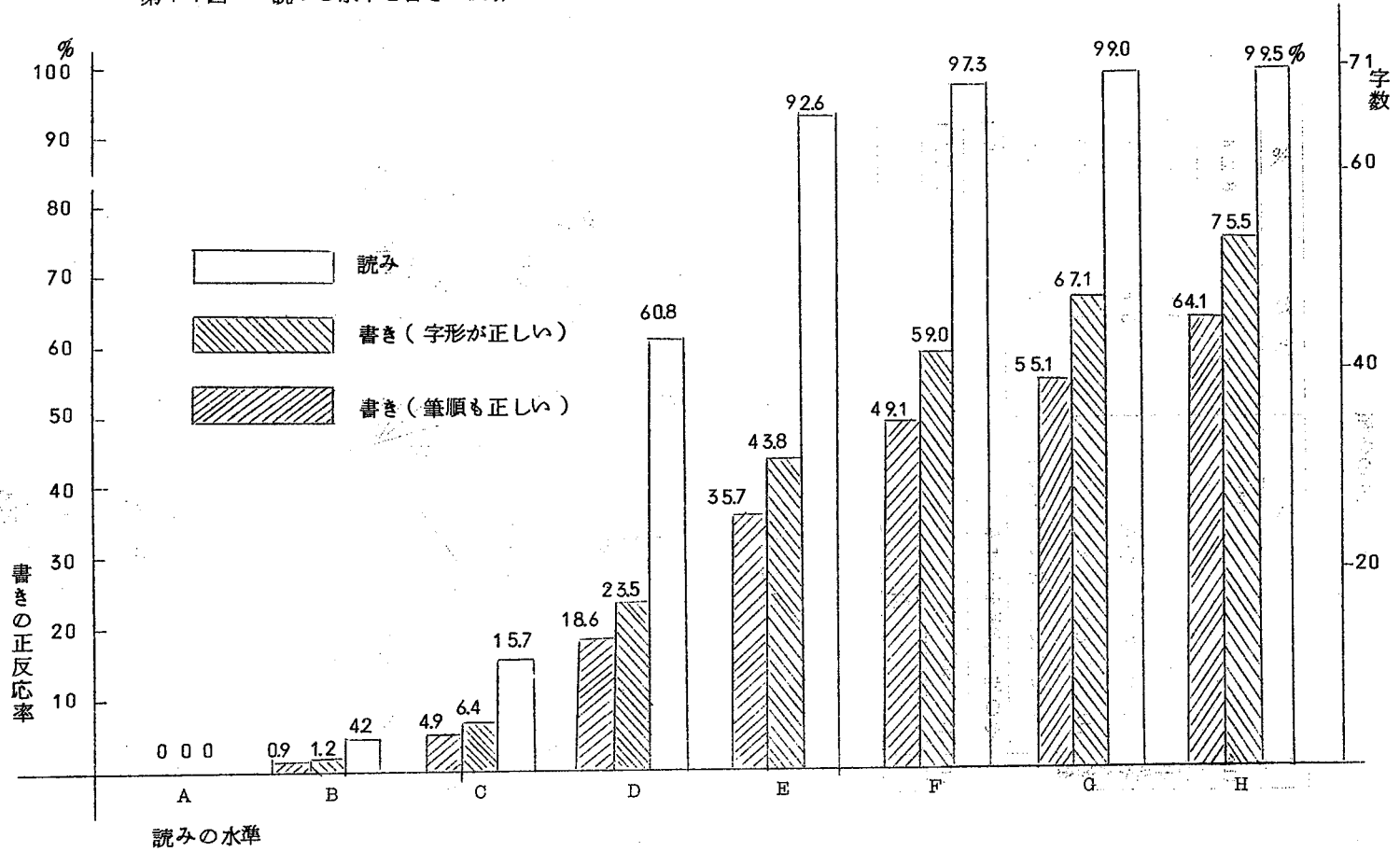
第7表 幼児の読み誤りの分類

読み誤りの種類		度数	%
(1)	71文字の範囲内で他の文字と読み誤る	7059	82.40
(2) 単語や人名を言う	i) その文字を含む単語	44	0.51
	ii) その文字を含む人名	34	0.40
	iii) その文字を含まない単語	141	1.65
	iv) その文字を含まない人名	32	0.37
(3)	その他の音節をあげる	129	1.51
(4)	不明	1128	13.71
計		8567	

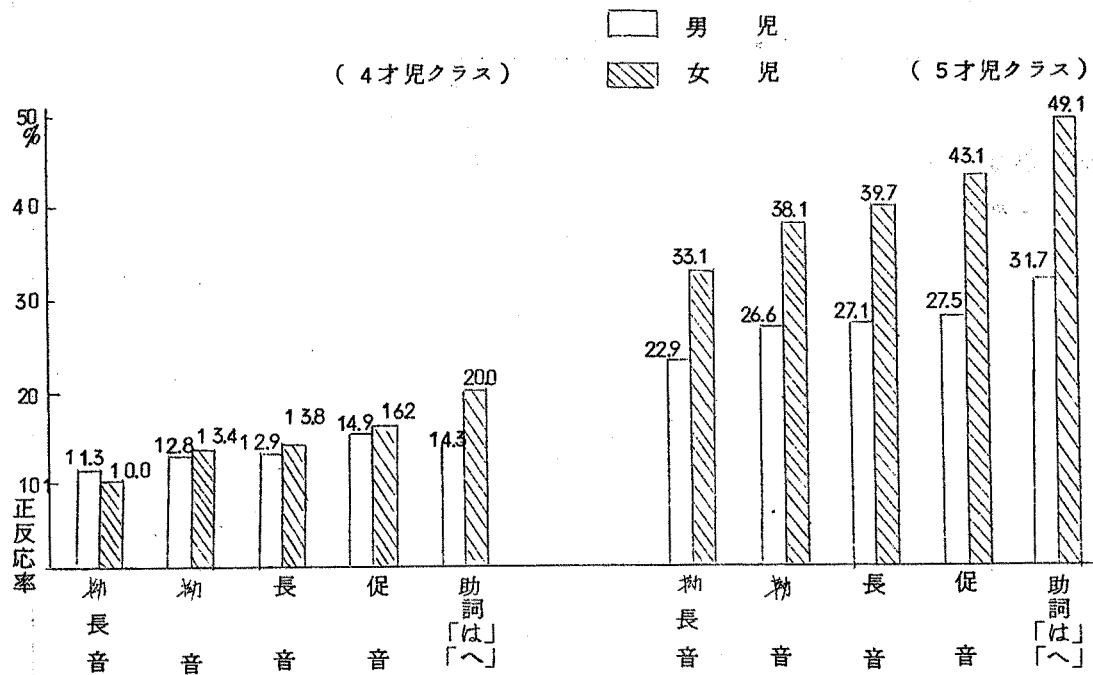
第13図 幼児のかな文字の書き誤りの分類

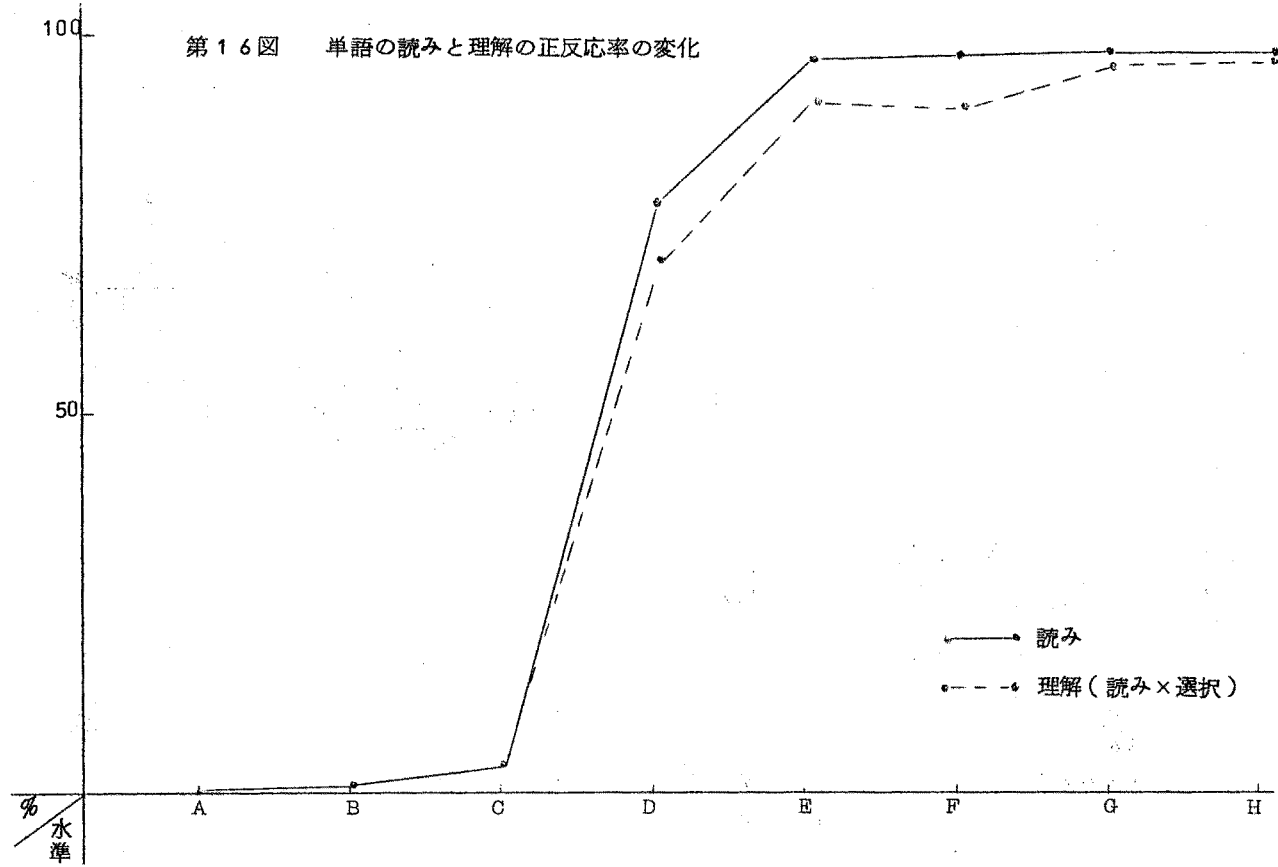


第14図 読みの水準と書きの関係(71文字)



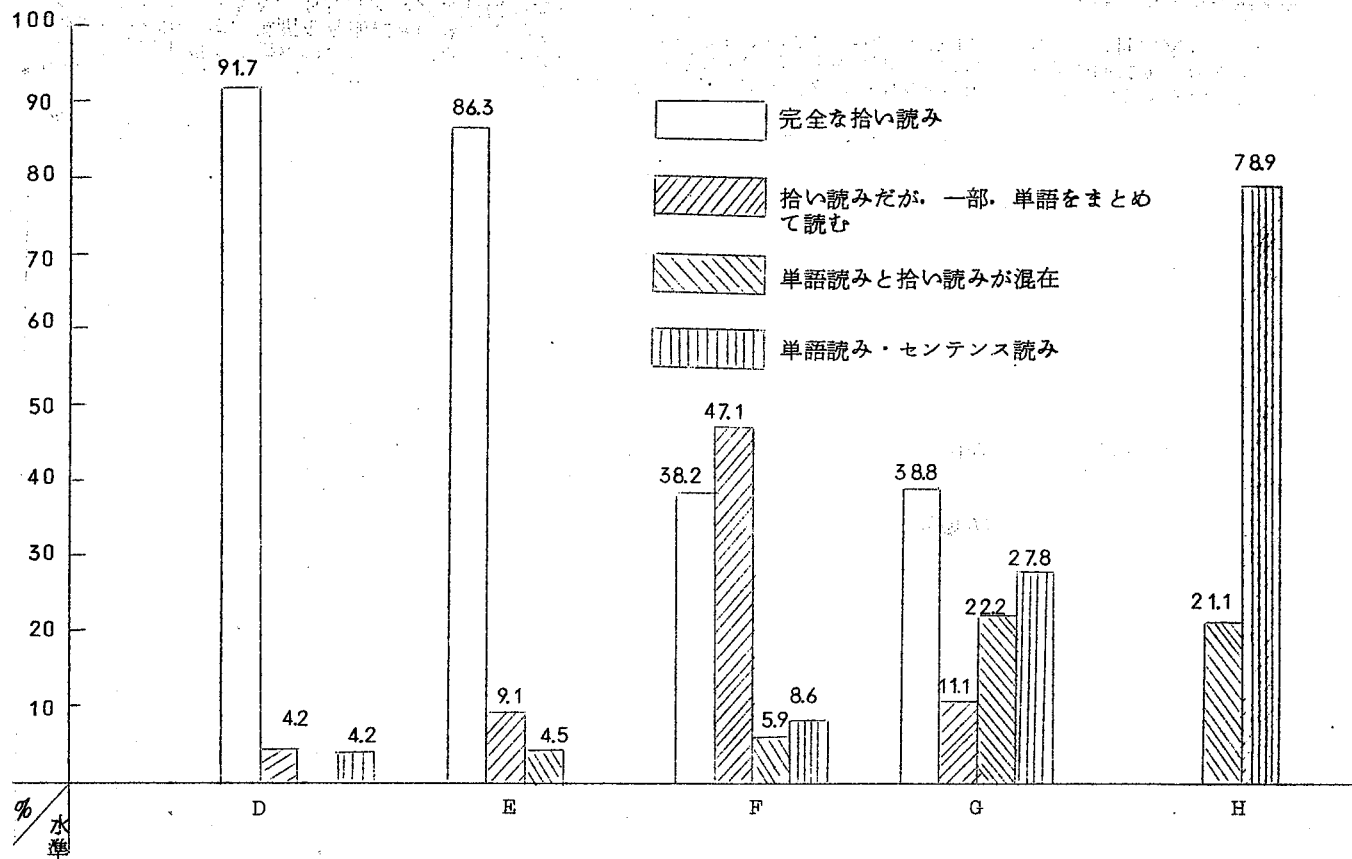
第15図 各特殊音節の正応率の比較(難易度)





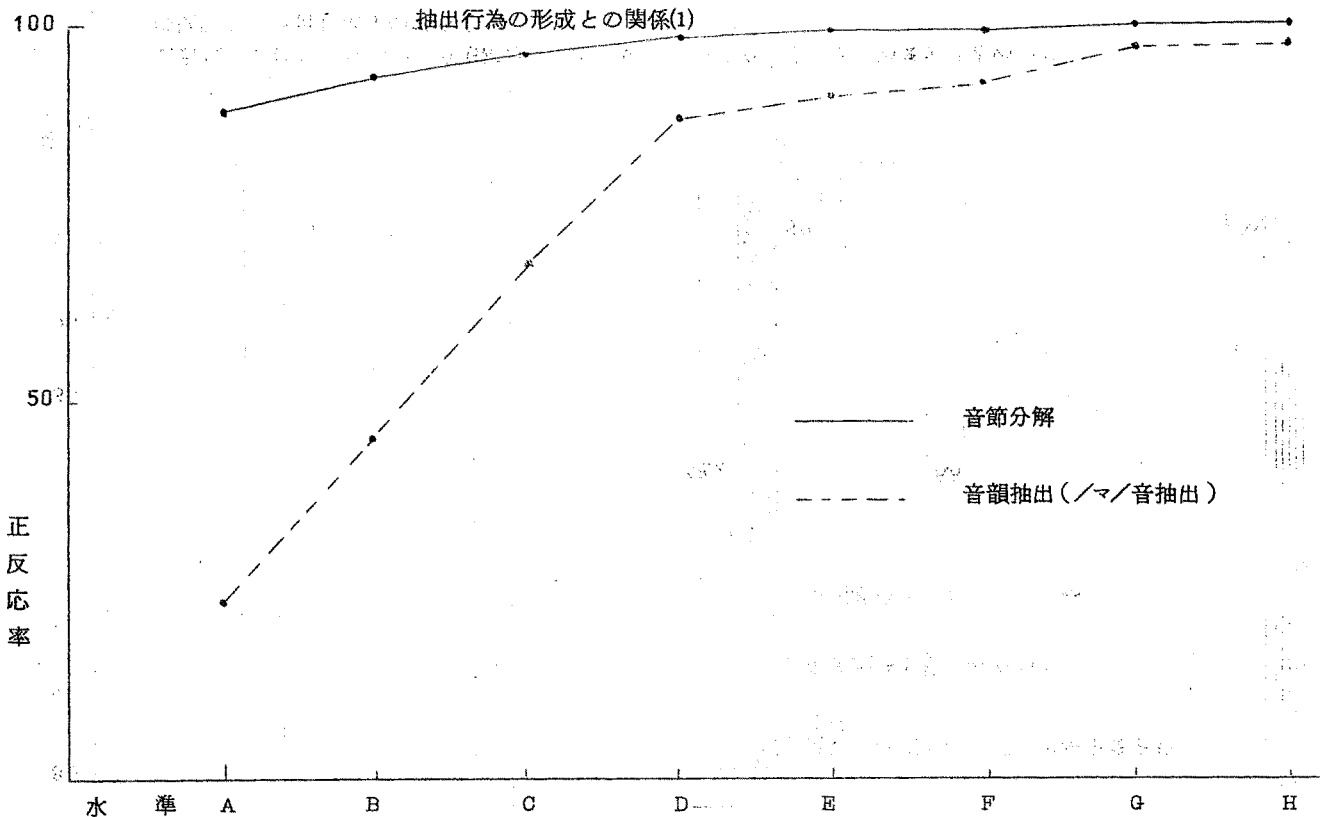
* これは、「あり」「うま」「おひなさま」「おとこのこ」の4語について調べた結果の平均正反応率を示したものである。読みの正反応は、1字もまちがわず正しく読めた場合、理解の正反応は、正しく読み、かつ、類似したものがかゝれてある4つの絵単語の中から、その該当する絵を選択した場合を指す。

第17図 ** 読みの水準と読み方の型の関係



** これは、「はなこさんの うちには かわいい ちいさな くまが います」という文を音読させ、その反応から分析したものである。

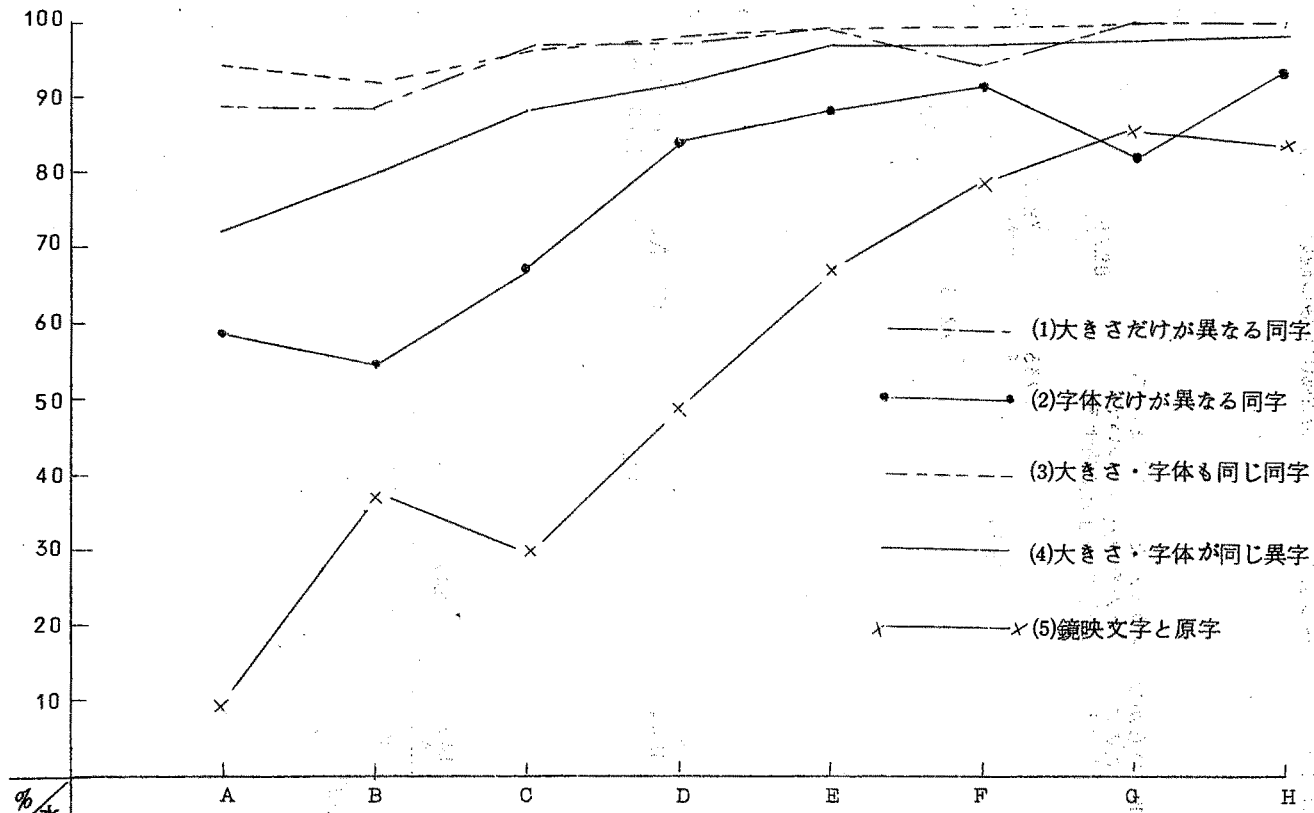
第18図 *かな文字の習得の程度(読みの水準)と音節分解、



—30—

*これは、幼児に、ダルマ、マスク、タマゴ、タヌキ、オヒナサマ等、/マ/という音を語頭、語中、語尾に含むか、まったく含まない3~5音節単語17語について、その語を示す絵単語とその絵の下にその語の音節の数だけマス目が横にかゝれてある図版と3cmの積木を利用して、単語を音節に分けさせ(音節にくぎって発音しながら、それに対応して積木をマス目に入れる)、次に「今/マ/があった?」ときき、あれば/マ/の音に対応している積木をみつけ出す。音節分解は、文字をまったく読めない幼児でも、高い正反応率が示されている。音韻抽出は、はじめは、なかなか困難だが、文字習得の最初の段階で急速に進歩することが示されている。

第19図 ** かな文字の習得の程度と文字の字形の知覚識別機能の形成との関係

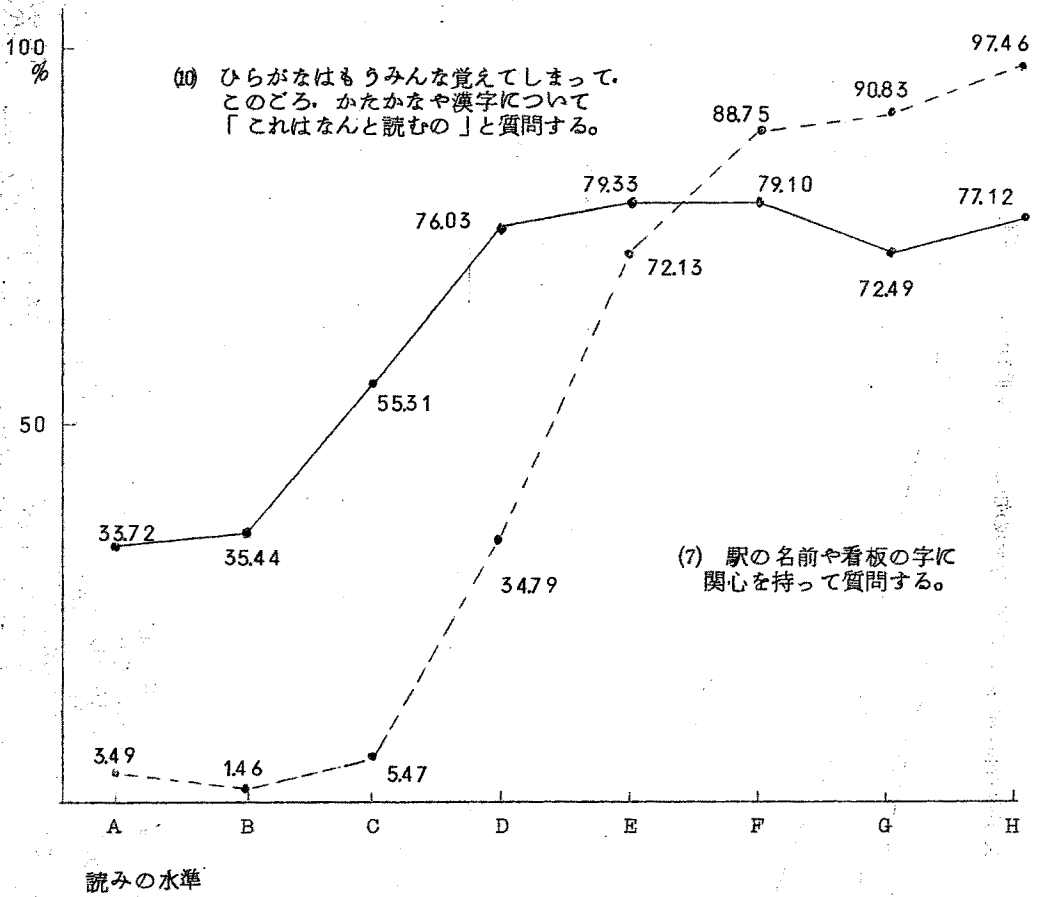


—31—

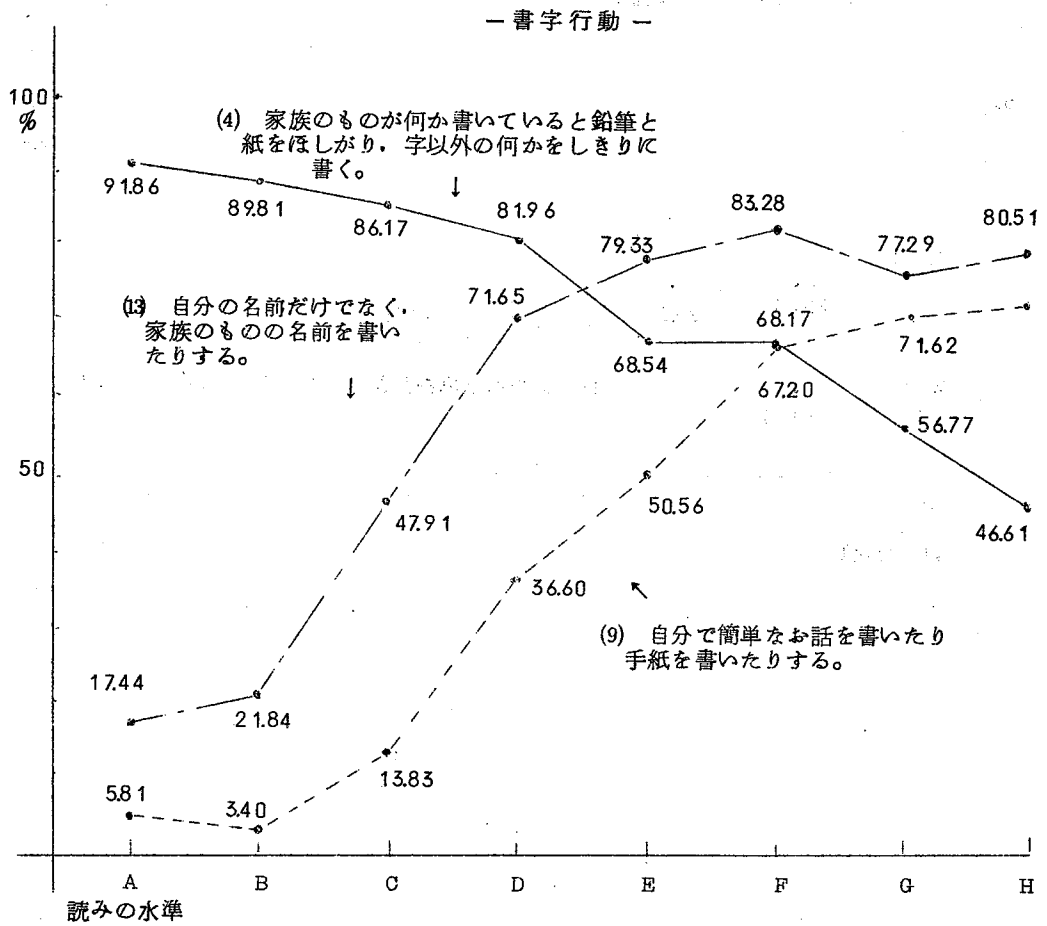
** これは、文字の物理的な刺激の要素に不可避的に入りこんでくる、文字の識別にとって、非本質的な他の要素（字の大きさ、字体の要素等）を捨象して、幼児がどれ程、文字の識別にとって重要な字形の要素に定位し、それらの異同をどの程度識別できるかを調べるため、幼児に、(1)大きさが異なる同字、(2)字体も同じ、同字、(4)大きさ、字体が同じ異なる字、(5)大きさ、字体が同じ原字と鏡映字を、それぞれ対にして提示し、（各関係4～10問）、それが同じ字か、ちがう字かを判断させたものである。(1)、(3)、(4)の関係の文字対は、文字をまったく読めない幼児でも正しく、その異同を判断できるが、字体が異なる場合、字形に定位できなかったりすることが示されている。特に、鏡映文字と原字は、（異なる字だと判断する練習を与えても）同じ字だと判断する幼児が多く、それは、習得に応じて改善されるが、なお水準にいたっても、その正反応率は80%代にとどまっている。

第20図 読みの水準と幼児の言語活動(1)(親の観察による)

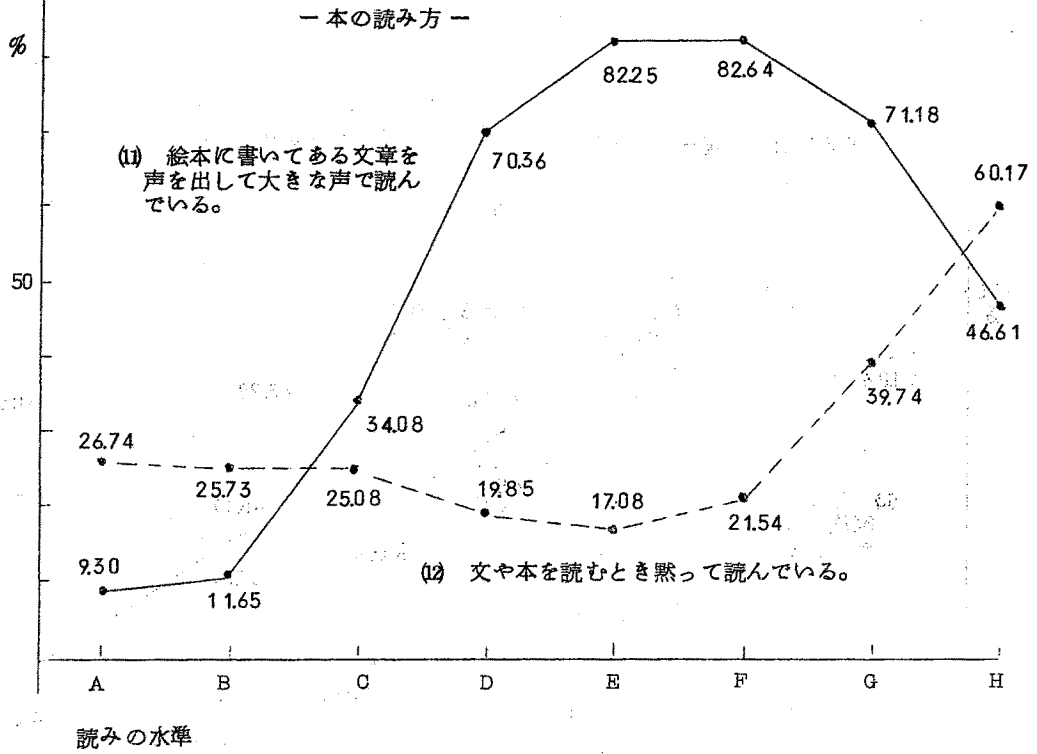
— 質 問 —



第21図 読みの水準と幼児の言語活動(2) (親の観察による)



第 2 2 図 読みの水準と幼児の言語活動(3) (親の観察による)



調査Ⅱ 特定幼児の文字調査

1 目 的

- 1) 就学前(4・5才児クラス)の特定幼児がどの程度の文字を習得しているのか、テストによる定期調査等によって、読める文字、書ける文字の範囲と量を明らかにする。
- 2) 6か月間(10月～3月)に上のテスト等を追跡的に行なうことにより、上に述べた範囲と量の変化を明らかにする。
- 3) 日常的な観察と幼児の文字作品の収集、家庭からのアンケート調査を通して、幼児の文字使用の実態と、文字を習得する過程、要因、文字習得経路等を明らかにする。

2 調査方法

1) テストの内容と構成

(1) 文字の読み書きについての定期調査

- a) 定期調査:「ひらがな」の読み・書き、 b) 定期調査:「かたかな」「漢字」「算用数字」「アルファベット」の読み・書き、 c) 定期調査:文字の自由書き調査。

文字の種類	内 容
ひらがな	清音45字、撥音1字、濁・半濁音25字 計 71字
かたかな	上に同じ 計 71字
漢 字*	教育漢字 主として小学校低学年用 計168字
算用数字	0より9まで 計 10字
アルファベット	AよりZまで 計 26字
総計346字	

* かたかな・アルファベットと比較したときに、漢字に関してのみ、提出文字数を限ることは、最善の策とはいえないのであるが、調査規模および幼児に対するテスト効率からみて、小学校低学年用漢字168字を用意すれば、だいたい読める文字の大部分をまかなうと考えた。

(2) 文字の習得経路についての調査

(3) 文字資料の蒐集

- a) 一斉保育の中での幼児の作品、 b) 幼児の自発的な作品。

(4) 幼児の読み・書き行動の観察

- a) 保育中の読み・書き行動、 b) 自由時間中の読み・書き行動。

(5) 幼児の質問の記録

(6) 家庭からの情報の収集

- a) アンケート調査、 b) その他の情報の収集

2) 被調査児

5才児4.6名、4才児2.6名。ただし、今回の報告は調査開始時点において、平がなの読み
の水準がE水準以上にあるもので、かたかな、漢字等の習得経路に特徴があるとみられる幼児
4.1名。

3) 調査期間と調査園及び調査者

昭和42年10月～3月にわたり、各園の教師が実施手引により、調査を実施した。

<調査園>

函 館	函館短期大学付属幼稚園	富 山	富山大教育学部付属幼稚園
室 蘭	優美幼稚園	名 古 屋	青葉幼稚園
山 形	さゆり幼稚園	京 都	京都教育大学付属幼稚園
栃 木	呑龍幼稚園	広 島	呉第一幼稚園
東 京	東京学芸大学付属幼稚園	島 根	北堀幼稚園
"	小川幼稚園	香 川	高松幼稚園
横 浜	東寺尾幼稚園	徳 島	内町幼稚園
埼 玉	川口南幼稚園	大 分	長浜幼稚園
新 潟	あさひ幼稚園	長 崎	島原幼稚園

<調査者>

また、各幼稚園における調査者名は次表のとおりである。各調査者は定期調査・観察・資
料収集など、必要な調査事項の実施に堪能な者として、園長または園長推薦による者によ
って構成されている。

第8表 特定幼児調査者一覧

分類	幼稚園名	調査者	分類	幼稚園名	調査者
1	函館短期大学付属幼稚園	高橋博子 森優子 尾崎喜久	10	富山大学教育学部 付属幼稚園	杉谷利枝子 高桑幸子
2	優美幼稚園	今井貞子 母坪縫子	11	青葉幼稚園	榊田登美子 坂井倭文子 中村多栄子
3	さゆり幼稚園	木俣和子 高橋宮子 小林孝子 佐藤勝子	12	京都教育大学付属 幼稚園	藤原愛子 島本さち子
4	吞龍幼稚園	横塚八重子 木村育代子 山口道子	13	呉第一幼稚園	杉峰恵子
5	東京学芸大学付属 幼稚園	益田勢津子 西沢幸子	14	北堀幼稚園	柳原悦子 藤原三葉
6	小川幼稚園	松田敦子 原田愛子	15	高松幼稚園	井上範子
7	東寺尾幼稚園	亀井和子 亀井喜久治子 遠藤幸子	16	内町幼稚園	新居久美子 安原茂子 伊東ムツ子 安友和子
8	川口南幼稚園	今関信子 石井克子	17	長浜幼稚園	宇野真知子 姫野秀子 佐藤満子 三重野智子
9	あさひ幼稚園	小林美代子 吉田恵己子	18	島原幼稚園	佐藤克子 山崎栄子 反田敦子 柴田ヒサ

3) 特定幼児群の特性

ここで報告する特定幼児群（5才児クラス：41名）はこの調査では2つの特徴的な性格をもっている。

第23図 特定幼児の読みの水準（ひらがな）

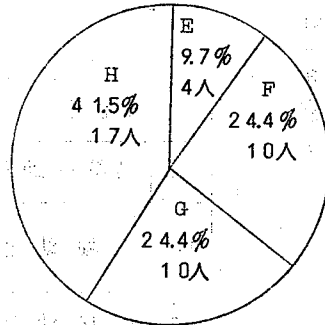


表 特定幼児の読み書き両水準の関係

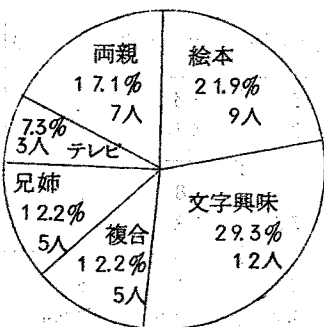
読み \ 書き	U 0字	V 1~5	W 6~20	X 21~40	Y 41~59	Z 60~71
E			●	●	●●	
F			●●		●●●	●●●●
G					●●●●●	●●●●
H				●●	●●	●●●● ●●●● ●●●● ●●●●

上の23図及び9表は調査開始（10月）の特定幼児群の読み書きの水準を示したものである。

- (1) 一つは、ひらがなの読みの水準が調査開始時はE水準以上であり、また、調査最終時は大部分が読みでH水準、書きでZ水準に達した。すなわち就学までにひらがな文字の読み書きが完成し、初歩的な段階での文章の読みが可能になり、読み書きの諸活動が日常生活において逐行されつつある被調査児群である。したがって彼らは第1章の全国調査の対象になった就学前児童が、就学後の比較的近い将来において、当然習得するであろう読み書き能力および

びその活動内容を予測しうる先駆的存在としての性格をもっている。

第24図 特定幼児の文字習得経路
および読み書き活動



左図は、調査園からの回答によって、特定幼児群を分けたものである。左図のうち、複合の項には絵本、テレビなど2つ以上の習得経路をあげた幼児を含めた。

(2) 今一つは文字の習得に関して、テレビ・絵本などの文字提示の媒体、ならびに両親などの文字教示者、また、幼児自身の文字への興味・関心が所属園のクラスの中でも明白であると認められた幼児をもって構成された。そして、すべての被調査児は、アンケートおよび幼児自身の回答から見ると、家庭で特別に組織的な教育指導を受けていない。さらに、かれらの大部分がすばらしい読み書き能力の習得者であった結果から見て、学校という組織的・系統的な文字教育を受ける前段階での文字習得の可能性と条件を知るための、モデル的存在である。

4 結 果

1) 読み書きの範囲と量

(1) 読み書きの水準の進歩

第10表 特定幼児群の読みの水準の進歩（ひらがな）

調査期	読みの水準	E	F	G	H
	N %				
10月	N %	4 9.7	10 24.4	10 24.4	17 41.5
12月	N %	2 4.9	5 12.2	9 22.0	25 61.0
2月	N %		3 7.3	8 19.5	30 73.2

第11表 特定幼児群の書きの水準の進歩（ひらがな）

調査期	書きの水準 N %	U	V	W	X	Y	Z
		0字	1~5字	6~20字	21~40字	41~59字	60~71字
10月	N %			3 7.33	3 7.3	13 31.7	22 53.7
12月	N %				3 7.3	8 19.5	30 73.2
2月	N %				2 4.9	4 9.8	35 85.4

就学前の2月調査では特定幼児群の大部分の幼児は読みではH水準、書きではZ水準に達している。すなわち、就学までにひらがな文字の読み書きの完成を示している。

(2) 読み書きできる文字の量

第12表 特定幼児群の文字量（2月調査）

読・書	字数 N %	字数					
		51~100	101~150	151~200	201~250	251~300	301~350
読み	N %		3 7.32	20 48.78	9 21.95	4 9.73	5 12.16
書き	N %	7 17.07	15 36.55	13 31.71	3 7.32	2 4.87	1 2.44

就学直前の2月調査では、大部分の者が提出文字346字（ひらがなを含む）のうち151字以上を読み、また、100字以上を書くことができる。

第13表 かたかな・漢字・アルファベット・数字の読み書きの平均・範囲

調査月	文字 読み書き 平均 範囲	かたかな		漢字		アルファベット		数字	
		読み	書き	読み	書き	読み	書き	読み	書き
10月	平均	55.49字	19.76字	35.95字	13.78字	7.24字	5.37字	9.84字	9.07字
	範囲	71-1	71-0	163-0	55-0	26-0	24-0	10-7	10-0
12月	平均	62.37	30.32	43.78	19.59	9.63	7.27	9.95	9.63
	範囲	71-10	71-0	166-2	116-2	26-0	25-0	10-9	10-8
2月	平均	66.07	36.22	53.17	28.12	11.68	9.32	9.95	9.73
	範囲	71-24	71-6	168-8	146-2	26-0	26-0	10-9	10-8

上表はかたかな、漢字、アルファベット、数字の各文字について、読み書きの平均及び範囲を示したものである。これによって、(1)かたかなの読み、数字の読み書きはほぼ大部分の者が完全にできている。(2)どの文字の習得(ひらがなをのぞく)も個人差がいちじるしく大きい。

2) 読み書きの正答率順位

第14表 かたかなの正答率(読み)全体平均

キ 97.6	マ 93.5	ン 91.0	ア 87.8	ノ 85.4	ネ 80.5
ヘ 97.6	ラ 93.5	ニ 90.2	テ 87.8	ザ 85.4	ヂ 75.6
リ 96.8	ゴ 92.7	ズ 90.2	ホ 87.8	ボ 85.4	メ 74.8
ギ 96.8	バ 92.7	ポ 90.2	ダ 87.8	ケ 84.6	ユ 74.0
カ 96.7	ハ 92.7	ミ 89.4	グ 87.0	フ 83.7	ゾ 73.2
ヤ 96.7	ド 92.7	イ 89.4	ジ 87.0	ブ 83.7	ツ 73.2
ベ 95.9	ル 91.9	タ 89.4	デ 87.0	エ 83.7	ワ 72.3
セ 95.1	コ 91.9	ヒ 89.4	ビ 87.0	ゲ 83.7	ソ 66.7
ガ 95.1	ト 91.9	ス 88.6	レ 87.0	ヨ 83.7	ヅ 61.8
パ 94.3	ク 91.1	ブ 88.6	ロ 87.0	ナ 82.1	ヌ 60.1
ウ 93.5	ゼ 91.1	ム 88.6	オ 86.2	シ 81.3	ヲ 37.4
ベ 93.5	ビ 91.1	モ 88.6	サ 85.4	チ 80.5	

第15表 かたかなの正答率(書き)全体平均

カ	81.3	ダ	55.3	ビ	48.8	ヒ	42.3	ケ	39.0	ワ	29.3
ク	72.3	コ	54.5	ブ	48.8	エ	41.5	レ	39.0	シ	29.3
ガ	69.1	グ	54.5	ベ	48.0	ス	40.7	ソ	38.2	ヌ	28.5
キ	65.0	イ	53.7	マ	47.1	セ	40.7	ル	38.2	ゾ	28.5
バ	63.4	ペ	52.9	ハ	46.3	ナ	40.7	ゼ	37.4	ザ	28.4
ト	61.8	バ	52.0	ビ	45.5	テ	40.7	モ	35.0	チ	27.6
リ	58.5	ウ	51.2	ブ	45.5	デ	40.7	ユ	34.1	ネ	25.2
ノ	56.9	ア	50.4	ヨ	43.9	ミ	40.6	ポ	34.1	ヅ	25.2
タ	56.1	ン	50.4	ニ	43.1	フ	39.9	サ	32.5	ム	24.4
ヤ	56.1	ヘ	49.6	ホ	43.1	ズ	39.9	ロ	31.7	ヲ	24.4
ゴ	56.1	ギ	49.6	ボ	43.1	オ	39.8	メ	30.9	ヂ	19.5
ド	56.1	ラ	48.8	ン	42.3	ツ	39.8	ゲ	30.9		

上表は10月、12月、2月のかたかなの読み書きの結果からの全平均正答率を、正答率の高い文字から低いものへと配列したものである。これらの平均正答率はそれぞれが5才児クラスの一般的水準と考えることはできない。しかし、文字の相対的難易を考えるためには有効である。(以下同じ)

(2) 漢字

第16表 漢字の読み 正答率順位(全体)

漢字の右下の数字は配当学年
* 印は1年早く学習する漢字。

%	漢字	%	漢字
86.2	一 ₁ 子 ₁	66.7	四 ₁ 十 ₁ 川 ₁
84.6	二 ₁	65.9	大 ₁
82.1	三 ₁	63.4	五 ₁
74.8	山 ₁	61.9	六 ₁
70.7	中 ₁	61.0	本 ₁
67.5	日 ₁	60.2	七 ₁ 月 ₁

漢字	漢字
人 ₁	足 ₁
火 ₁	耳 ₂ 母 ₂ 幼 ₂ 林 ₂ *
金 ₁	町 ₂ *
円 ₂ * 木 ₂	海 ₂ 空 ₂ *
八 ₁ 水 ₁	出 ₂ * 生 ₁ 鳥 ₂ 東 ₂ 島 ₃ 年 ₂ * 百 ₂ * 北 ₂
号 ₃	京 ₂ 冬 ₂ 分 ₂
九 ₁ 赤 ₁ 田 ₁	会 ₂ 見 ₂ * 行 ₂ 多 ₂ 長 ₂ 馬 ₂
少 ₂	秋 ₂ 春 ₂ 父 ₂
口 ₁	竹 ₂
下 ₁ 小 ₁ 上 ₁ 森	気 ₂ * 光 ₂ 黒 ₂ 西 ₂ 組 ₂ 朝 ₂
女 ₁ 土 ₁	園 ₃ 玉 ₂ 色 ₂ 新 ₃ * 前 ₂ 池 ₂ 地 ₂ 虫 ₂ * 名 ₂ *
白 ₁	国 ₂ 谷 ₂ 知 ₂ 動 ₃ 南 ₂ 米 ₂ 明 ₂
手 ₁	家 ₂ 校 ₂ * 時 ₂ 車 ₂ * 声 ₂ 入 ₂ * 門 ₂ 話 ₂
終 ₃	元 ₂ 食 ₂ * 力 ₂ *
雨 ₁	音 ₂ * 夏 ₂ 休 ₂ * 死 ₃ 先 ₁ 文 ₂ * 用 ₂
花 ₁	雲 ₂ 戸 ₂ 古 ₂ 紙 ₂ 字 ₂ * 心 ₂ 走 ₂ 毛 ₂
王 ₂ *	自 ₃ * 草 ₂ 鉄 ₃ 方 ₂ 夜 ₂
青 ₁	今 ₂ 電 ₃ *
目 ₁	作 ₂ 書 ₂ 早 ₂ * 動 ₃ 步 ₂ 夕 ₂ * 立 ₂ *
学 ₂ *	悪 ₃ 間 ₂ 工 ₂ 思 ₂
千 ₂ *	外 ₂ 汽 ₂ 合 ₂ 糸 ₂ * 晴 ₃ * 切 ₂ 半 ₂
雪 ₂	尻 ₃ * 聞 ₃ *
正 ₁ 天 ₂ *	何 ₂ 友 ₂
左 ₁	表 ₂ 来 ₂
犬 ₂ * 高 ₂ 村 ₂ * 風 ₂	考 ₂ 読 ₂
石 ₁	稚 ₂
牛 ₂ 男 ₂ 右 ₁	

第17表 漢字の書き 正答率順位(平均)

%	漢 字	%	漢 字
82.1	一 ₁	19.5	犬 ₂
78.8	二 ₁	17.1	五 ₁
75.6	三 ₁	15.7	女 ₁
65.9	山 ₁	15.4	右 ₁
61.8	中 ₁	13.0	手 ₁ 石 ₁ 天 [*]
59.3	川 ₁	11.4	玉 ₂ 国 ₂ 正
54.5	日 ₁	10.6	左 ₁ 多 ₂
52.1	子 ₁	9.8	青 ₁ 村 [*] ₂ 町 [*] ₂
52.0	十 ₁	9.7	男 [*]
51.2	大 ₁	9.0	雨 ₁ 千 [*] ₂ 入 [*] ₂
49.6	四 ₁ 月 ₁	8.9	生 ₁ 赤 ₁ 百 [*] ₂
48.0	人 ₁	8.2	母 ₂
43.1	円 [*] ₂ 本 ₁	8.1	学 [*] ₂ 見 [*] ₂ 高 ₂ 自 [*] ₂ 分 ₂ 門 ₂
42.3	田 ₁	7.3	牛 ₂ 号 ₂ 出 [*] ₂ 夕 [*] ₂ 北 ₂ 明 ₂ 力 [*] ₂
40.7	木 ₁	6.5	花 ₂ 京 ₂ 谷 ₂ 今 ₂ 少 ₂ 名 [*] ₂
39.8	口 ₁	5.7	間 ₂ 休 [*] ₂ 元 ₂ 古 ₂ 東 ₂ 年 [*] ₂
36.6	八 ₁	4.9	工 ₂ 行 ₂ 耳 ₂ 心 ₂ 鳥 ₂ 冬 ₂ 島 ₂ 父 ₂
34.1	七 ₁ 森 ₁	4.1	光 ₂ 西 ₂ 文 [*] ₂ 米 ₂ 方 ₂ 用 ₂
31.7	土 ₁	4.0	戸 ₂ 車 [*] ₂
30.9	上 ₁ 水	3.3	竹 ₂ 立 [*] ₂
30.1	六 ₁	3.2	会 ₂ 字 [*] ₂ 先 ₁ 虫 [*] ₂ 幼
29.3	下 ₁	2.4	海 ₂ 外 ₂ 校 ₂ 秋 ₂ 春 ₂ 新 ₂ 雪 ₂ 前 ₂ 池 ₂ 長 ₂ 馬 ₂
28.5	小 ₁	1.6	風 ₂
27.7	火 ₁	1.6	音 ₂ 家 ₂ 気 [*] ₂ 汽 ₂ 空 ₂ 作 ₂ 死 ₂ 時 ₂ 尻 [*] ₂ 色 ₂ 終 ₂
26.8	白 ₁	0.8	食 ₂ 声 ₂ 切 ₂ 早 [*] ₂ 草 ₂ 足 ₁ 地 ₂ 半 ₂ 聞 [*] ₂ 来 ₂
24.4	九 ₁	0.8	何 ₂ 考 ₂ 合 ₂ 米 ₂ 紙 ₂ 思 ₂ 書 ₂ 晴 ₂ 組 ₂ 走 ₂ 知 ₂
22.7	目 ₁	0	朝 ₂ 動 ₂ 道 ₂ 南 ₂ 歩 ₂ 話 ₂
21.9	金 ₁	0	悪 ₂ 雲 ₂ 園 ₂ 夏 ₂ 黒 ₂ 稚 ₂ 鉄 ₂ 電 ₂ 読 ₂ 表 ₂ 毛 ₂
21.1	王 [*] ₂ 林 [*] ₂	0	夜 ₂ 友 ₂

(3) アルファベット

第18表 アルファベットの読み
正答率順位(全体)

88.6%	Q	28.5%	G Z M
77.2%	A	27.7%	J
74.0%	B	25.2%	U
70.0%	C	24.4%	I T
50.4%	K	23.6%	V
48.0%	O	22.8%	F
41.5%	X	22.0%	E
39.8%	S	21.1%	Y
35.8%	P	20.3%	R W
34.1%	H	17.9%	L
29.3%	D N		

第19表 アルファベットの書き
正答率順位(全体)

69.9%	A	24.4%	Z D U
58.5%	B	21.9%	T
47.1%	Q	21.2%	I
45.5%	C	20.3%	N S
43.9%	O	19.5%	E
37.4%	X	18.7%	V Y
35.0%	K	17.1%	G W
32.5%	H	16.3%	R
28.4%	P	14.6%	F L
25.2%	M	13.0%	J

<Q>がすべての特定幼児によく読まれ、書かれたのは、この調査時点において、(おぼけのQ太郎)という漫画主人公の影響による。

3) 漢字と音訓の読み

表の見かた： <->について説明する。86.2%は特定幼児群の3回にわたる読みの平均正答率。「イチ 100」、「ひとつ 5.7」はその86.2%の正答者の全員が「イチ」という音で読み、また、正答者の5.7%が「ひとつ」という訓で読んだことを示す。

第20表 漢字と音訓の読みの割合(全体)

*音訓の基準外の読み 数字は%

一 86.2	イチ ひとつ	100 5.7	二 84.6	ニ ふたつ	100 5.9	三 82.1	サン みっつ み	72.9 27.1 8.5	四 66.7	ヨン よっつ	26.5 4.1	五 63.4	ゴ いっつ	100 13.6
六 61.9	ロク むっつ	97.7 11.4	七 60.2	シチ なな	54.5 56.8	八 52.8	ハチ やっつ	100 5.4	九 50.4	キュウ ここのつ	72.2 38.9 2.8	十 66.7	ジュウ とお	97.7 13.6
悪 9.8	アク わるい	57.1 57.1	雨 35.8	あめ	100	雲 13.0	ウン くも	8.3 100	円 55.3	エン	100	園 17.1	エン その	100 11.1
王 34.1	オウ	100	音 13.8	オン おと	69.2 38.5	火 57.7	カ ひ	67.3 60.0	何 7.3	なに	100	花 35.0	カ はな	11.4 100
家 15.4	カケ いえ	40.0 6.7 100	1 夏 13.8	なつ	100	会 19.5	カイ	100	海 22.0	カイ うみ	45.5 86.4	外 8.9	ガイ そと	60.0 100 80.0
学 31.7	ガク まなぶ	96.7 3.3	月 60.2	ゲツ ガツ つき	59.4 21.7 37.7	間 9.8	カン ゲン あいた ま	50.0 25.0 33.3 16.7	気 17.9	キ	100	汽 8.9	キ	100
休 13.8	キユウ やすみ	36.4 90.9	牛 26.0	ギユウ うし	85.7 39.3	京 20.3	キョウ	100	玉 17.1	ギョク たま	17.6 88.2	金 56.9	キン かね	9.5 18 17.5
空 22.0	クウ そら	28.6 100	カ ゲ 下 44.7	した きたる おきる	4.4 22 91.1 200 2.2	見 19.5	ケン みる	18.2 100	犬 27.6	ケン いぬ	23.1 96.2	元 14.6	ゲン ガン もと	46.7 46.7 40.0
戸 13.0	と *べ	84.6 23.1	古 13.0	コ ふるい	64.3 64.3	工 9.8	コウ	100	口 46.3	コウ くち ぐち	4.7 8.14 20.9	光 17.9	コウ ひかり ひかる	27.8 83.3 11.1
行 19.5	コウ いく ゆく	70.0 10.0 40.0	高 27.6	コウ たかい	51.7 79.3	校 15.4	コウ	100	考 5.7	コウ かんか かえる	16.7 100	合 8.9	ゴウ あり	42.9 71.4
号 52.0	ゴウ	100	国 16.3	コク くに	72.2 44.4	黒 17.9	コク くろ	11.1 100	谷 16.3	たに	100	今 11.4	コン いま	42.9 78.6
左 28.5	サ ひだり	18.5 92.6	作 10.6	サク つくる	100 9.1	山 74.8	サン ザン やま	9.0 3.0 100	子 86.2	シ こ	11.3 98.6	糸 8.9	いと	100

紙 25.0 13.0 かみ 100	シ 9.1 思 9.8 おもう 90.9	死 30.8 13.8 しぬ 7.7	字 シ 100 13.0	耳 みみ 100 23.6
ジ 88.2 時 29.4 15.4 とと *と 5.9	自 シ 100 12.2	児 シ 40.0 20.0 40.0 8.1 こご 10.0	ンキ 13.3 色 ショク 26.7 17.1 いろ 100	車 シヤ 75.0 15.4 くるま 81.3
シュ 8.6 手 38.2 て 100	秋 あき 100 18.7	終 おわり 100 37.4	出 シュツ 4.8 でる 85.7 だす 14.3 いす 4.8	春 シュン 17.6 18.7 はる 100
ショ 61.5 書 10.6 かく 53.8	ジョ 17.9 女 おんな 87.2 41.5 め 5.1	小 ショウ 47.9 ちんさい 35.4 14.6 4.47 こ 18.8	ショウ 38.8 少 すこし 8.2 47.2 すくない 6.1	ショウ 71.0 正 ただしい 19.4 29.3 *まさ 35.5
ジョウ 12.5 ウ 8.13 あがる 6.3 44.7 かみ 14.6	ショク 93.3 食 たべる 33.3 14.6	シン 30.8 心 13.0 こころ 84.6	シン 9.44 新 あたらしい 16.7 17.1 *い 5.6	シン 2.4 森 44.7 もり 100
ジン 19.6 ニン 25.5 ひと 82.3 59.3 ひと 2.0	スイ 73.6 水 みず 67.9 52.8	セイ 73.9 うまれる 21.7 いきる 13.0 21.1 なま 4.3	セイ 15.4 青 33.3 あお 76.9	サイ 11.1 ザイ 11.1 西 17.9 セイ 5.6 にし 9.44
セイ 6.7 声 15.4 こえ 100	セイ 37.5 晴 はれ 100 8.9	セキ 19.2 石 2.68 いし 100	セキ 6.8 赤 50.4 あか 100	切 きる 100 8.9
シユ 100 雪 ゆき 30.1	セン 92.3 先 さき 30.8 13.8	セン 70.6 千 30.9 ち 35.3	かわ 9.65 川 66.7 かわ 3.5	ゼン 50.0 前 17.1 まえ 87.5
クミ 100 組 17.9 ぐみ 5.9	早 はやい 100 10.6	ソウ 45.5 草 12.2 くさ 90.9	ソウ 3.64 走 13.0 はしる 81.8	ソク 20.8 足 25.2 あし 100
ソン 3.6 村 27.6 むら 100	タ 79.2 多 おおひ 37.5 19.5	ダイ 57.1 大 おおきい 70.0 65.9	ダン 20.0 男 26.0 おとこ 96.0	チ 6.50 知 しる 3.50 16.3 *とも 5.0
チ 1.67 池 17.1 いけ 88.9	地 チ 100 17.1	稚 チ 100 4.9	竹 たけ 100 18.6	チュウ 56.5 中 70.7 なか 63.8
チュウ 38.9 虫 17.1 むし 83.3	チョウ 47.6 長 ながひ 81.0 19.5 *は 14.3	チョウ 41.7 町 22.8 まち 87.5	チョウ 11.1 朝 17.9 あさ 94.4	チョウ 15.0 鳥 21.1 とり 100

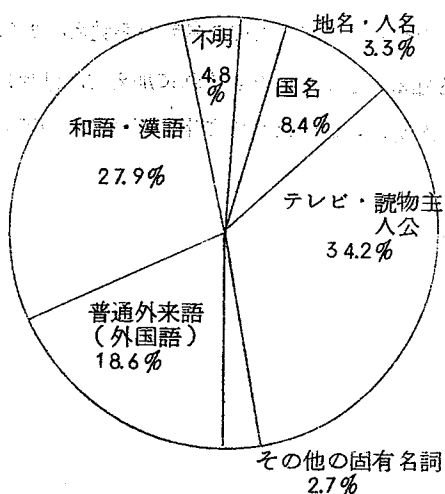
鉄 122 てつ 100	テン 100 天 29.3 *あま 3.3	た 80.9 田 50.4 だ 25.5	電 11.4 デン 100	ト 92.9 土 41.5 つち 35.7
トウ 727 東 ひがし 59.1 21.1 *あずま 4.5	トウ 10.0 冬 20.3 ふゆ 100	トウ 12.5 島 21.1 しま 100	ドウ 61.5 動 10.6 うごく 23.1	トウ 43.8 道 16.3 みち 81.3
トク 50.0 読 5.7 よむ 100	ナン 50.0 南 16.3 みなみ 87.5	ニチ 90.2 日 ひ 32.8 67.5 か 3.3	ニュー 20.0 入 りる 60.0 15.4 いり 26.7 *はいる 6.7	ネン 81.8 年 21.1 とし 36.4
バ 26.3 馬 19.5 うま 89.5	ハク 15.0 白 しろ 97.5 40.7 しろい 2.5	麦 6.5 むぎ 100	半 8.9 ハン 100	百 21.1 ヒャク 100
父 18.7 ちち 100	フウ 14.8 風 27.6 かせ 100	ブン 19.0 分 プン 47.6 20.3 プン 23.8 *イタ 61.9	ブン 92.3 文 13.8 モン 15.4	ブン 50.0 聞 8.1 きく 50.0
ベイ 25.0 米 こめ 68.8 16.3 よね 43.8	ホボ 20.0 歩 10.6 10.0 10.0 10.0 10.0 あるく 50.0	ボ 13.0 母 はは 91.3 23.6 *かあ 4.3	ホウ 83.3 方 ボウ 8.3 12.2 かた 58.3	ホク 23.8 北 21.1 きた 100
ホン 72.9 本 ポン 5.1 61.0 よね 43.8	メイ 35.0 明 ヨウ 10.0 16.3 あかるい 45.0 あき 35.0 あける 5.0	メイ 47.1 名 な 7.6.5	け 100 毛 13.0 げ 8.3	モク 56.1 木 55.3 き 57.4
モク 10.7 目 32.5 め 100	門 15.4 モン 100	ヤ 27.3 夜 よる 90.9 122 よ 9.1	タ 10.6 夕 ゆう 100	ユウ 42.9 友 7.3 とも 100
ユウ 12.5 右 ウ 4.2 26.0 みぎ 95.8	用 13.8 ヨウ 100	ヨウ 100 幼 23.6 おさない 4.2	くる 87.5 来 き 7.5.0 6.5 こ 12.5	リキ 2.50 力 リョク 12.5 14.6 ちから 81.3
リツ 2.73 立 10.6 たつ 72.7	リン 9.1 林 はやし 100	ワ 56.3 話 15.4 はなし 62.5		

4) どのような単語によって習得するか

特定幼児群がかたかな・漢字などに関して習得する過程には、いっほうりでは単独に文字を文字として覚える事実は認められるものの、多くの文字は幼児をとりまく身近事物を表わす記号としての役割を持つがゆえに、幼児に親近性のある魅力的なある単語、ある文脈、ある話題と密接なかかわりを持つことは明白である。このことは、漢字の音訓の読みにより、また、面接調査における習得経路調査で確かめられた。さらにこのことを自由書きについて調べてみると次のようになる。

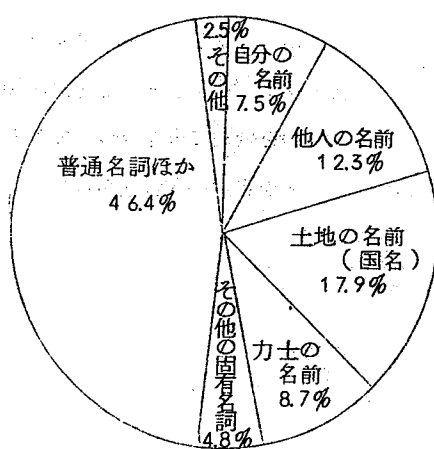
第25図

かたかな使用語タイプの割合



第26図

漢字の使用語タイプの割合



第25図はかたかな使用語タイプを7類型に分け、それらの割合を示したものである。テレビ・読物主人公の名前に使われたかたかなは全体の34%を占め、次いで和語・漢語をかたかなで書いたものが全体の28%を占め、さらに普通外来語(外国語を含む)が19%を占めている。

それらの各類型に含まれるおもな使用語には次の内容を含んでいる。

テレビ・読物主人公(被調査児の創作になる怪獣名を含む)

ケムルジー、ゲスラ、ゴメス、ピーターパン、ゴジラ、マッハナメゴン、パーマン、アントラ、カネゴン、ウルトラマン、マグラ。

普通外来語(外国語を含む)

スピードアップ、ケーキ、パトカー、ピアノ、テレビ、サイン、チョコレート、タイル、

ボール、ボート、トランプ、ライオン、キリン、モルモット、ロケット。

国名

アメリカ、イギリス、チリ、フランス、ソビエト、ドイツ、スペイン、インド。

地名・人名

マドリッド、ローマ、パリ、青の里。

その他固有名詞

12チャンネル、中日ドラゴンズ、アルプス。

なお、和語・漢語を1類型にあげたのは、ウシ、エンピツ、トケイなど、本来かたかな以外で表記すべき内容をかたかな書きにした内容を含めることにしたためである。

以上、かたかな使用語について略述したが、漢字の使用語類型については26図の通りである。幼児はかたかなをテレビ、漫画読み物の主人公やその他の登場人物の名前から覚え、また漢字は固有名詞の語で覚えることは面接調査からも知ることができた。それに加えて、幼児はそれらの単語を紙面に書きつづって遊ぶという行為がかれらのかたかな文字の習得に有効に働いていることが自由書き調査からわかった。

<アンケート>幼稚園における文字の扱い

1 目 的

このアンケート調査の目的は、① 幼稚園における文字の扱いの実態を明らかにする。② 読み書き全国調査の結果と幼稚園における文字の扱いとの関係を明らかにする。

2 内容と構成

この調査は、全国調査で、調査園となった幼稚園を対象にしたアンケート調査である。そして内容は次の3部に分かれている。

- (1) 幼稚園の文字環境
- (2) 保育における教師の文字提示
- (3) 幼児に対する文字の読み書きの指導

(1)の「幼稚園の文字環境」は、教室・園庭などにある諸施設に付した文字標識・掲示物などを内容にした文字環境の調査であり、(2)の「保育における教師の文字提示」は日常の保育活動に利用される板書事項を内容にした教師の文字提示の調査である。そして、(3)の「幼児に対する文字の読み書きの指導」は、名前の読み書きの指導のことや文字の質問に対する答え方、絵本・ワークブックの利用など、直接に文字指導に結びついた内容の調査である。

3 調 査 園

アンケートの対象になった調査園は、「就学前児童の言語能力に関する全国調査」(第1年次)において抽出された122園である。ただし、回収された有効数は115園であった。

回収率 $115/122 = 94.3\%$

なお、115園の中には、4才児クラスをもつ80園が含まれている。

公私	年齢	5才児		4才児	
		園数	割合	園数	割合
1. 公立		38園	33.04%	18園	22.50%
2. 私立		77園	66.96%	62園	77.50%

4 調査期日 昭和42年12月

5 文字の扱いの実態

I 幼稚園内の文字環境

1. 文字で表示してあるものは

- 幼児たちの部屋、職員室、便所、遊び室の類の名まえ (76.5%)
- 教室内に飾ったり、展示したりするもの(幼児作品をのぞく)の類の名まえ (39.1%)
- 園庭、運動場にある樹木、花、記念物の類の名まえ (31.3%)
- 無 答 (11.3%)

2. 上記の文字表示のしかたは

- 原則としてひらがなで示してある。 (52.9%) ○ 無 答 (1.0%)
- カタカナで書くべきものはカタカナで示してある。 (15.7%)
- 漢字で示してあることもある。 (30.4%)

3. 教室内に、あ・い・う・え・お(絵入りを含む)の一覧表は

- はってある。 (19.1%)
- はってない。 (80.0%)
- 無 答 (0.9%)

4. 教室内に幼児名を誕生月ごとに分けて書いたお誕生表は

- はってある。 (86.1%)
- はってない。 (13.0%)
- 無 答 (0.9%)

5. 園内で、各幼児名が表示してあるものは

- 靴箱(90.4%) ○ 帽子かけ(79.0%) ○ 幼児の製作展示物(66.7%)
- 手ぬぐいかけ(30.7%) ○ ロッカー(41.2%)
- その他の具体例(49.1%)

○ 整理戸棚 12園、○ 道具箱 11園、○ 教材ークレヨン、ハサミ、自由画帳
(10園など)

6. その他、幼稚園内の文字環境のうち、文字や語の形でなく、文や文章の形で呈示してあるものにはどんなものがありますか。

- 具体例(51.3%)

○ 約束や注意事項 23園

しずかにあるきましょ。こんしゅうのおやくそく。みずをつかわないこと。

こわれているのでつかえません。あしたもってくるもの。

○ 幼児向けニュースや新聞 11園

○ ポスター、標語 8園

○ 歌詞や祈りのことば 5園

II 保育における教師の文字呈示

1. 教師がきまって板書しておくことは

○ 原則として板書しない。(36.5%)

○ きまって板書することがある。(60.0%)

○ 無答 (3.5%)

板書の内容は

○ 毎日の月日(60.0%) ○ 毎日の曜日(54.8%) ○ 当番者名(36.5%)

○ お休みの入の名まえ(22.6%) ○ 注意事項(27.0%)

○ その他の具体例(25.2%)

[歌詞 11園, 毎日の天候 4園, 毎日の連絡事項 4園など]

* 各項目とも実施時期は1学期より。ただし、〈注意事項〉の板書のみ2学期より開始する園が多い。

2. 板書以外にカード等で示しておくことがあったら、具体的にお願いします。

○ 具体例(65.2%)

○ 当番者名(表) 66園, ○ 月日 20園, ○ その月の誕生者名 11園

[○ 曜日 9園, ○ 約束や注意事項 3園, ○ 天候 3園 など]

3. 保育のとき、必要に応じて、童話の題名、遊びの名まえなど文字で呈示することは、

○ 原則としてしないことにしている。(47.0%)

○ 文字で呈示することがある。(53.0%)

○ 無答 (0.9%)

文字呈示の内容は

○ 話す童話の題名 15園, ○ 歌詞の中のことば 9園, ○ ことば遊び 7園

[○ 話し合いに出た動植物の名まえ, ○ 劇遊びの配役名 4園 など]

* 各項目とも約5割の園が1学期より呈示し、4割の園は2学期より呈示している。

4. その他、保育中に、教師が文字や単語の形でなく、文や文章の形で呈示することがありましたら、具体的にお示しください。

○具体例 (36.5%)

- 歌詞 16園、 ○伝言メモーがっこうのおにわにいます。ほけんしつにいます。
〔 4園、 ○幼児のつくった詩(ことば)やお話 3園 など。〕

*各項目とも約5割の園が1学期より呈示し、3割の園は2学期より呈示している。

Ⅲ 幼児に対する文字の読み・書きの扱い

1. 幼児の製作物については

- 幼児名は書かせないことにしている。(8.7%)
○幼児名の書ける子には書かせている。(37.4%)
○原則として、幼児名を書かせ、書けない子には教師が書いてあげている。(52.2%)
○無 答 (1.7%)

*各学期ごとの該当項目をたずねているために、%の合計はかならずしも100%にはならない。以下同じ。

2. 幼児からの、文字の質問については

- かるく答えてあげる程度にしている。(65.2%)
○ていねいに教えて、他の文字にも注意を向けるようにしている。(30.4%)
○無 答 (4.3%)

*〈かるく答える〉は1学期、〈ていねいに教える〉は2～3学期が多い。

3. 幼児が絵本を読んだり、何かを書いているときの誤りに気づいたときは、

- 特別には注意しないことにしている。(21.4%)
○読みの場合だけ、注意することになっている。(11.3%)
○読み・書きともに、そのつど注意している。(63.5%)
○無 答 (3.5%)

4. あ・い・う・え・お・ 50音表については、

- 使っていない。(81.7%)
○読ませている。(4.4%)
○読ませたり、書かせたりしている。(9.6%)
○無 答。(4.4%)

*使用時期は大部分が2～3学期よりはじまる。

5. 文字指導のためのワーク・ブックについては、

- 使わない。(78.3%) ○無 答 (1.7%)
- 使っている。(20.0%)

*使用時期は大部分が2～3学期よりはじまる。

6. 友だちの名を板書して読ませることは、

- していない。(81.7%) ○無 答 (3.5%)
- している。(14.8%)

7. その他の保育活動で、幼児に組織的に文字を読ませたり、書かせたりしていることがあります。具体的な事例をお示しください。

○具体例 (25.2%)

- 郵便ごっこをして手紙の読み書きをさせる 10園
- カルタをつくって読ませる 4園
- 絵本をいっせいに見せる 4園
- ことばあそび、あいいうえお、かずあそびの本を使わせる 4園
- ひらがなを書く練習をさせる 4園
- 毛筆習字、文字合わせをさせる 各1園 など

IV 幼児に対する筆順の扱いについておたずねします。

- 原則として、筆順の注意はしないことにしている。(34.8%)
- 名まえだけは正しい筆順で書けるようにしている。(36.5%)
- まちがいがやすい筆順はみんなに分からせている。(11.3%)
- いっせいに、手を空書などして徹底させることがある。(13.1%)
- 無 答 (4.4%)

*筆順の扱いをする園の大部分は、2～3学期よりはじめています。

6 文字の扱いの程度と読みの水準

年令	段階	文字環境	文字提示	読み書き指導
4才	上	37.09%	27.70%	28.08%
	中	32.86	36.34	35.75
	下	26.47	32.56	34.29
5才	上	63.73	65.43	65.29
	中	62.71	62.74	65.98
	下	65.56	63.84	60.11

表中の％は読みの水準がE水準以上の割合を示す。

文字の扱いを文字環境、文字提示、読み書き指導とに分け、各幼稚園を上・中・下の3段階に分け、そこに就園する被調査児のE水準(読みの水準)以上の割合を示したのが上表である。

これによると、文字環境と4才児の読みの水準がE水準以上の割合とは、単調増減の傾向を示すが、他にはその傾向がみられない。すなわち、現在の段階では、幼稚園における文字の扱いの程度と幼児の読みの水準とは文字環境(4才)のほかは直接の関係がみられない。

7 文字の扱いと年令及び地域の差

(4才)

(5才)

層群	文字環境	文字提示	読み書き指導	文字環境	文字提示	読み書き指導
I	6.73	3.27	5.69	6.67	4.07	6.50
II	6.55	2.69	4.50	6.56	3.72	6.39
III	6.22	2.59	4.13	6.15	3.79	6.76
全体	6.60	2.84	4.74	6.49	3.88	6.54

(注) 層群について； 全国調査における各層が単独では園数が少なすぎるため、I=(1~3)、II=(4~6)、III(7)の3層群に分けた。

これによれば、傾向的に、4才児クラスより5才児クラスの方が文字提示や読み書き指導において積極的である。特にII層・III層間の読み書き指導には4才と5才の間に有意な差がある。

すなわち、都市の5才児は4才児にくらべて文字の読み書き指導が積極的である。

なお、文字の扱いのうち、文字の提示および幼児に対する読み書きの指導で、年齢差、地域差が確認されたおもなことは、次の諸点である。

- ① 5才児クラスでは、4才児クラスよりも「お休みの人の名前や注意事項」をよく板書する。また、「文字の質問」にはていねいに答えて、他の文字にも注意を向けるようにする。
- ② 都市の5才児クラスでは、4才児クラスより「文や文章の提示」をよくする。また、「ワークブック」をよく使う。
- ③ 郡部幼稚園の4才児クラスでは、都市の4才児クラスよりも「五十音表やワークブック」をよく利用する。

目 次

	ページ
調査の概要	1
調査Ⅰ 読み・書き水準調査	3
1. 目的	3
2. 調査方法	3
3. 家庭・幼稚園に対するアンケート調査	4
4. 再テスト・補充テスト	4
5. データの集計と計算	5
6. 調査園・調査員	5
7. 結 果	9
(1) 読みの水準	
(2) 幼児のかな文字の読み・書きの習得状況	
(3) 幼児のかな文字習得を条件づけている諸要因とその機制	
(4) この期の幼児の文字活動の特徴	
調査Ⅱ 特定幼児の文字調査	3 5
1. 目的	3 5
2. 調査方法	3 5
3. 特定幼児群	3 8
4. 結 果	3 9
<アンケート> 幼稚園における文字の扱い	5 1